
遠き風に願いし君は

こっこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遠き風に願いし君は

【Nコード】

N2114E

【作者名】

こっこ

【あらすじ】

何も要らない。世界の片隅で、彼とひっそりと生きていければいい。ささやかな少女の願いは、だが叶わなかった…… 携帯版は、1行毎の改行です。こどもの日企画「ムーンチャイルド」参加作品です。 “ムーンチャイルド”の語で検索すると、他の企画作品も読めます

第1節 災厄

In the Capital

少女はただ、呆然としていた。

クレーターを中心に座り込んで。

どうしてこうなったのか、彼女には分からなかった。いや、分かっているが信じたくなかった。

この大陸の中でも屈指の軍事国家・ゼイテ。強力な力にものを言わせ周囲の国々を飲み込んできた、その国のここは首都だ。

いや、首都だった……と言っべきだろう。

ほんの一刻前まで大河ルーナスの下流、島にも見える巨きな三角州とその兩岸に、首都の町並みは広がっていた。

それが今は、ない。

町の中心には王城の代わりに少女のいるクレーターが穿たれ、その外側は元は何があったのかも分からない瓦礫の山だ。三角州を囲んでいた城壁も崩れ、兩岸の町並みにまで被害は及んでいた。果たして王都に住むうちのどれほどが、無傷で済んだのか。

災厄の引き金となった少女は、まだ座り込んでいる。

年は……十歳かそのくらい。柔らかそうな薄い色の髪に透き通った瞳の、かわいい少女だった。

どこか虚ろな瞳から、ぽつりと涙がこぼれる。

周囲は静かだった。

あるいはもう救助が始まっているのかもしれないが、この辺りに近づく人影はない。そもそも近づくことも出来ない。

今だ煮えたぎるクレーターそのものが、人を阻んでいるのだ。

だが土砂が一瞬にして蒸発したために出来たクレーターの中にいながら、少女は髪の毛一筋たりとも傷つく気配はない。

「あたし……」

桜色の唇から、言葉が漏れる。

「あたし、あたし……」

答えはなかった。

あるはずもなかった。

それから……どのくらい、少女は座り込んでいたのだろうか？

今朝は青く広がっていた空だが、今は巻き上げられた土砂でかき曇り、やがて重い雨が落ちてきた。

黒い雨。

一瞬にして焼け焦げた灰なのか、それともただの土なのか　と
もかく雨は、不吉に黒い。

少女の着ている純白の衣に、その雨がぽつぽつと染みを作っていた。
った。

雨に打たれる彼女の瞳から、次々と涙がこぼれ落ちる。

大人ならばきつと、自分がこうせざるをえなかった理由を見つけ、
自分自身をかばうことが出来ただろう。

だがまだ幼いこの子には、そう考える余裕さえなかった。ただ目の
前の現実には、打ちのめされるだけだ。

降りしきる雨が熱い大地に落ちては蒸発し、霧となっていく。
やがて、周囲が冷え始めた。

「いたぞっ！」

突然雨の音を破って、怒声が響く。

はっと少女が顔を上げた。
様々な声が飛び交う。

「あれだっ、あの魔女だ！」

「可愛いナリしやがって……！」

本能的に少女は、現れた人影とは反対へあかずさった。

その辺りで拾った棒きれ、庭にありそうな鎌や鍬、あるいは包丁、時には剣　ともかくそういった「武器」を手にした人々が、クレイターの縁を超えて降りてくる。

その表情は明らかに殺気立っていた。

僅か数日前に、歓呼の声で少女を迎えたというのに。

「いや……」

立ち上がり、駆け出す。

掴まったら何をされるか、分からないと思った。

「逃げるぞ！」

「逃がすかつ！」

追う声を背に、必死に逃げる。

だが追われるのは子供で、追うのは大人たちだ。身軽さでは上回っても体力ではかなわない。

徐々に双方の距離は詰まり、じき少女は追い詰められた。

「いや、やめて……」

恐怖でそれ以上、言葉が出ない。

少女をかばう者は、誰もいなかった。

泣きながら怯える少女に手を上げられる大人など、普通はいない。しかし憎悪は、そんな当たり前の心境をごく簡単に葬ってしまっている。

「さっさと殺しちまえ」

「馬鹿言え。八つ裂きにして、苦しませてやる！」

ひとりの男が、ぎらりと狂った視線を向けた。

「女房も子供らも、こいつのせいで」

「うちの子もだよっ！」

じり、と包囲の輪が縮まる。

その中で少女は怯えるばかりだった。もうどうしていいのか、分からない。

「い……や……」

切れ切れにやっと言った言葉も、大人たちを押しとどめることはなかった。

凶器が振り上げられる。

「いやあっ!!」

瞬間、光が閃った。

世界が、太陽が落ちたが如き白に染め上げられる。

そして轟音。爆風。

「あ、あ……」

殺される、その思いから固く瞳を閉じていた少女は、恐る恐る動いて、知った。

先刻と同じ過ちを、繰り返したことに。

新たに穿たれたクレーターはずっと小さなものだが、取り囲んでいた大人たちは跡形もなかった。

先ほどとは違う混乱と恐怖が、少女を襲う。

何もかもが怖かった。

信じていた大人たちも、そして自分自身も……。

泣きながら、歩き出す。

行く当てはなかった。だがそれでも、ここを離れようと思った。

道路とおぼしき瓦礫の間を抜け、ただひたすらに歩く。

今度は誰も、邪魔はしなかった。

第2節 出会い

Neil

「遅くなっちまったな……」

独り言をつぶやきながら、俺は通りを駆けてた。

いい加減陽が落ちかけてて、そろそろ行きかう人もまばらだ。

近道するか。

縄張りに入っただなるともかく、この辺はまだそこからちょっと遠い。なのに日が落ちてからもウロついてたら、場所が場所なだけにヤバかった。

建物の間の、路地っというより隙間に入り込んで、次の通りへ一気に抜ける。

それを繰り返して何度目か。

「つと」

暗い物陰をうっかり見落として、俺はなんかにつまづいた。けっこうデカイ。

「つたく、こんな真ん中に、こんなでかいモン！」

悪態つきかけて、途中で言葉を飲み込む。

ボロ布かなんかだと思ってた塊から、足が出てた。

それも、人間の。

ただ、そんなに大きくない。たぶん十歳くらいの子供だ。

死体。

その言葉が真っ先に、脳裏に浮かんた。

この辺りじゃ……時々ある話だ。

交易で栄えてるこの街だけど、貧民街はひたすら貧しい。スリ、
かっぱらいは当たり前だし、コキ使われまくったり食いつぶれた
りで死んだ人 けっこ子供が多い がこうして道端に放り出
されてることも、たまにはあった。

しゃがみこんで、そつと毛布をめくる。

うわ。

見られないようなのを想像してたけど、違う意味で絶句する。
淡い色の髪。陶器みたいな肌。真つ白な衣装。「汚れてない」っ
て言葉が似合う、人形みたいにきれいな女の子だ。

どっかケガした様子はなかった。だからたぶん、病気が衰弱死だ
ろう。

ふつうはこれほどきれいな子なら、どっかの金持ちに売られてそ
れなりの暮らしが出来る。

もちろん奴隷扱いだけど、食いつぶれることはないし、運が良
けりゃ養子にしてもらえることだってあった。

万が一大人になる前に病死とかしても、道端にそのまま放り出さ
れるなんてことはない。家の墓地の隅っこくらいには、入れてもら
えるはずだ。

なのにこんなとこに死んで放り出されてるってのは、そんなちょ
こつとの幸運にさえ見捨てられて、独りっきりでここまでやっと生
きたんだろう。

かといって、この辺の通りの子でもないはずだった。

これほどの美少女なら、どこの縄張りに居ても噂になる。けど、

見たことも聞いたこともない。

だからたぶん、どつかこの辺のともない店に売られてきて、店の奥でコキ使われてたはずだ。

で、病氣かなんかのお決まりのパターンで……死んで放り出されただろう。

「ひどいよな……お前が悪いワケじゃないのに」

せめて町外れの共同墓地に、そう思ってこの子をくるみ直して抱き上げようとして。

生きてる？

触れた肌がまだあったかい。

「おい！」

ゆすつて軽くはたと、この子がうめいてかすかに目を開けた。透き通った、そんな感じの瞳。それが少しの間さまよった後、俺の方へ向けられる。

子供らしくない諦めきった表情に、寂しい微笑みが浮かんた。

ありがとう。でももう、いいの。

そう言ってるのが分かった。

「だめだ、死ぬな！」

思わず言葉が出る。

もう長くなさそうだけど、でも目の前で出会った子に、こんな死に方させたくなかった。

薄汚れた建物の裏で、ボロ布にくるまって虫にかじられながら独りで死ぬのを待つなんて、まともな死に方じゃない。

せめてベッドの上で、そう思って、この子を抱きなおす。

「もうちょっとがんばれ、いいな？」

ぐったりしてるこの子に声をかけながら、抜け道を急ぐ。家はここからならすぐだった。

古い石造りの階段を駆け上がって、ドアの前で騒ぐ。

「姉貴、開けてくれ！」

第3節

中から姉貴の声と、もうひとり別の人の声。

「どうしたんだ、ニール。いつに無く慌てて」

開いたドアから顔を出したのは姉貴じゃなくて、いつも姉貴を診てるドクターだった。ちょうど往診中だったらしい。

んで当然ながらドクター、俺の腕の中を見て血相変える。

「すぐ寝かせて」

俺ももちろんそのつもりだったから、そつとこの子を俺のベッドに下ろした。

「いったい、どこで？」

「向こうのパン屋の奥手。捨てられてた」

俺から様子を聞きながら、ドクターが手際よくこの子を診てく。

「まずいな、かなり衰弱してる」

「可哀想に……」

姉貴も起きてきた。

「姉貴、寝てなって」

風邪もひかなきゃ腹も壊したことない俺と違って、姉貴は昔から線が細くて身体が弱かった。ただ幸い、一昨年死んだ親父やお袋

こっちは俺がガキの頃　　がそれなり蓄え残してくれてて、その分で姉貴の薬代が賄えてる。

まあ、格安つてのもあるけど。

いつも診てくれてる没落貴族のドクター、若いのに腕も人柄も良くて、貧乏人の俺たちから見ると神様みたいな人だ。

もつともそれ差し引いても姉貴への往診が、多い上に安かったりタダだったりするのは、他にワケがありそうな気はする。

どうせなら、姉貴持つてつくねえかな？

弟の俺としちゃ、医者と一緒になつてくれた方が、姉貴のためにもいいと思う。

ただ、歳がけっこう離れてるからなあ……。

姉貴は18、ドクターは確か30くらい。

こんないい人がなんでこの歳まで独り身なのは、俺も良く知らない。

それに人が良すぎてドクター、自身も町外れの屋敷で、小間使いもない貧乏暮らしだったりする。

まあ俺らもその辺は立派な貧乏だから、どうってことないけど。

姉貴の方も見てると、けっこうドクターの事意識はしてる。

ただこっちも歳が離れてると、自分が弱いのを気にかけてた。

実際、今だってちょっとでも何かすると倒れるから、好きな刺繍とか編み物以外は一切させないくらいだ。

てか、それさえ最近は弱ってきて、だんだんペースが落ちてきてるし……。

あんまし考えたくないけど、姉貴も先は長くなさそうだった。

でも、目の前のこの子ほどひどくない。

「どうです？」

「今日か明日が峠だろう。暖かくして、飲めそうなら暖かいものを飲ませてやりなさい」

つまりは、息を引き取るまで看てるしかないってことだ。

それでもまあ……あの場所であのまま逝くよりマシだろう、そう

思いなおす。

2人分診てもらったから、その分いつもより多くお金を渡そうとしたけど、ドクターは受け取らなかった。

「あの子には、何もしてないからね……」
そういうことらしい。

「何かあったら、すぐ呼びに来るんだ。夜中でも構わないから」
「はい」

それからドアのところで姉貴となんかやり取りしてから、ドクターは出て行った。

姉貴がこっちへ戻ってくる。

「やつぱり、無理そう?」

「普通にムリだと思う」

ここまで弱ってるんじゃ、食べ物も喉を通るかどうか。そもそも、目を覚ますかどうかも怪しい。

で、当たり前だけど食べられなきゃ終わりだ。

「ちょっと隣から、スープもらってくる。つゆなら飲めるかもだし」
隣の部屋は、中年のおばさんが独り暮らしだった。話じゃ3年前の流行り病で、旦那も子供もいっぺんに全員亡くしたらしい。そのせいか、そのあと隣に越してきた俺たちを、まるで実の子供みたいに可愛がってくれてる。

最近じゃ寝てるほうが多い姉貴を置いて出かけられるのも、実言うとこのおばさんのおかげだ。

手先が器用なおばさんは、昼間出かけずに家で刺繍や編み物をして、それを売って生計立ててた。俺も時々見せてもらうけど、すごい細かくて綺麗なのを作る。

で、時々隣の姉貴の様子を見にきてくれるうえ、自分のと一緒に俺らのスープなんかを毎日作ってくれてた。

申し訳ないから、毎月ちゃんと食費は渡してるけど。

ともかくそのおかげで、パンとミルクとチーズさえ買って帰れば、あとは夕食にありつける寸法だ。

「お湯、沸かした方がいいかしら？」

「やめろつて。こないだかまどの火吹いてるうちに、ひっくり返つたろ？ あとで俺がやるつて」

あの時は2日寝込まれた。倒れた時に火傷しなかったのが幸いだ。そんなこと騒いでたら、ドアを叩く音がして隣のおばさんが入ってきた。

「ニール、帰ったのかい？」

スープ持ってきたから、早くお食べ。今日は野菜とソーセージだよ」

言いながら台所でスープを移す音が聞こえた後、おばさんがこっちの部屋へ来た。

「ほら、奥になんかこもってないで どうしたんだい、この子？」

「死に掛けて捨てられてたから、拾ってきたんです」

「なんだって！」

おばさん慌てて、この子の看病始める。

「可哀想に、こんなになるほど放って置かれて。ニール、すぐお湯沸かしとくれ」

「ほい」

と、この子が目を開けた。バタバタうるさくしたのが、マズかったらしい。

「ゴメンな、起こして。今お湯沸かして、スープ持ってきてやっから」

透き通った、でも焦点の合わない瞳が、こっちを向く。
そして、涙がこぼれた。

「お、おい、泣くなって」
思わずそう言ったけど、こいつが泣きたくなる気持ちはよく分かった。

だから、それ以上言わずに頭を撫でてやる。
それから、訊ねた。

「名前、言えるか？」

今訊いとかないと、最後までわからずじまいになりそうで、無理を承知で訊いた。

こいつの唇がかすかに動く。けど、聞き取れない。
耳を寄せる。

「……ファイ……ア……」
切れ切れにそう聞こえて、俺は訊き返した。

「ファイ、でいいのか？」

そうだと、こいつが僅かに微笑む。

「そか。ファイか。」

ここにいて、いいからな。ずっと

ファイがまた、泣き出した。

第4節

F i a s i d e

ふと、フィアは目を覚ました。

見慣れない質素な天井。見慣れない質素な部屋。

だが上掛けやシーツは、きちんと洗って陽に干された匂いがした。

どこだろう？

ぼんやりと考える。

はつきり覚えてるのは、捨てられたところまでだ。

ただ、それを恨む気持ちはなかった。

連れてきた者たちは何度も何度も謝りながら、店からはずっと遠いあの場所に、隠すようにして自分を捨てていった。

あいつに買われるよりは、ずっとマシだから……。

そう言っていた言葉に、偽りはない。

自分でも分かるほどに弱ってきていたフィアだが、完全に動けなくなったのは1週間ほど前だ。

起き上がるうとしても力が入らず、手伝ってもらっても立てなくなった。

もう長くはない、誰もがそう思った数日後。

「お前の買い手が決まった」

そう主が告げ、フィアとたまたま一緒にいた仲間は背筋が冷たくなった。

さらに買い手の名を聞いて、震えあがった。

主は普段は、店の者たちを売らずに『貸し出して』いる。その方

が長い間儲かるからだ。

だから『売る』というのは法外な金が積まれた時か　もう稼ぐことが出来ないと思われた時に限られる。

フィアの場合は、明らかに後者だった。

もう動けないフィアに、これ以上お金を稼ぎ出すことは出来ない。ならば死ぬ前に、欲しがる者に売って少しでも稼ごうという魂胆だ。

もちろん普通に考えれば、そんな子供を誰が買うのかと思うが……この世には悪魔も棲んでいる。

どうせ死んでしまうなら、その前に存分に愉しもう、という輩が。

普段は誰が誰に買われても、ともかくうわべだけは無関心を装う皆だが、この時ばかりは互いに囁きあった。

買い手の残忍さと変態ぶりは、よく知られている。それでも今まで誰もさほどの被害がなかったのは、ひとえに店から「貸し出されて」いたからだ。

だが買われてしまえば、その保護もなくなる。何よりフィアには、もう逃げるどころか抵抗する力さえ残っていない。

さすがに今回は、誰もが哀れんだ。

幸いフィアは館の中でも、年かさの者たちに可愛がられていて、彼らが行動に出た。主が留守にした隙にフィアを馬車の底に隠し、館の外へとどこにか出したのだ。

主には丸め込んだ医者と一緒に、急に息絶えたと言えはい。あれだけ弱っていれば、そういうことだって時にはある。

そして死体は、館の中に病気が広からないように、早々に捨てた。

ただ身寄りのない者同士、外へ出したものの行く当てはなかった。かといって孤児院などに連れて行けば、すぐ嘘がばれて連れ戻され、フィアはもちろん自分たちまでひどい目に遭うだろう。そういうコネが、館の主にはある。

結局僅かな時間ではどうすることも出来ず、館からはなるべく遠い貧民外の奥へ、見つからないように置いていくのが彼らには精一杯だった。

せめて、静かに死ねるようにと。

耳元で何度も謝っていた声を、フィアは覚えている。同時に、これで安心して死ねると思った。だから、恨んでなどいない。

それに。

こんな奇跡が起こったのだから……。

「ゴメンな、起こして。今お湯沸かして、スープ持ってきてやっくら」

聞こえた声に、視線をさまよわせる。

あの時自分に「死ぬな」と言った人が、心配そうに覗き込んでいた。

急に涙があふれてくる。

本当は当たり前の　でもフィアにとっては初めて言われた、「死ぬな」という言葉。

ひどく重くて、なのはどうして、こんなに輝く言葉なのだろう？

誰もフィアに、そう言う者はいなかった。館の誰が生きて誰が死のうが、ほとんど関心は示されなかった。

必要なのは商品であつて、その「誰か」ではなかったのだから。

「お、おい、泣くなつて」

そうは言つたものの彼は、それ以上は何も言わなかった。ただゆつくりと、頭を撫でてくれる。

そういえばこんな世界もあつたのだと、フィアはやつと思ひ出した。

ずっと忘れていた、暖かさ……。

「名前、言えるか？」

訊かれて、フィアは必死で答えた。かすれる声を、やつとの思いで繋ぎ合わせる。

聞き取れないのか、彼が耳を寄せた。

「フィア、でいいのか？」

伝わった、そのことに安心して微笑む。

彼も微笑んだ。

「そか。フィアか。」

ここにいて、いいからな。ずっと」

また、フィアの瞳から涙がこぼれた。

第5節

Neil

ドクターの見立てを裏切って、フィアはけっこうしぶとかった。あれから1週間、相変わらず起きられないし動けないけど、でもちやんと生きてる。

というより、必死で生きようとしてるみたいだった。拾ったあの時に見せた諦めの表情は、家へ連れて来てからは全く見せてない。

あと意外にも良くなったのが、姉貴の方だった。面倒見る相手が出来たせいで、気力が付いたらしい。

なんせあんなに寝てるしかなかった姉貴が、日中けっこう起きてるんだから、たいしたもんだ。

その姉貴が、フィアが眠ったのを見計らって、俺にそつと話しかけた。

「もっといい薬を飲ませて、美味しいものを食べさせたら、この子良くならない?」

「そりゃ、なるかもだけどさ……」

うちは実言えば、そんなにやたら貧乏ってワケでもなかった。贅沢さえしなきゃ、5年以上働かないで食える程度の金は、親が残してくれてたりする。

ただ、そうそう使うわけにもいかなかった。

なんせ姉貴は弱い。だから今でも薬が欠かせないし、これからだつてそうだろう。てか、もっと必要になるかもしれない。

そこへ加えて、フィアだ。

こいつが起きられないのをどうこう言う気は一切ないし、こうなつた以上最後までちゃんと面倒見るつもりだけど、やっぱりお金は

幾らかかかる。

かといって俺の稼ぎじゃ、暮らすだけで手一杯だ。

けつきよく薬代は親の金を少しづつ食いつぶして出すしかなくて、今までの姉貴の分だけで、残してくれたお金が2割はなくなってる。

黙ってるけど。

ともかくそんなわけで、今以上には出せなかった。

それをどう言いつくろおうか、考えあぐねて黙っていると、姉貴の方が切り出した。

「あのね、ニール。これ、換金して使ってくれない？」

「え？」

姉貴が俺に差し出したのは、かなり大きな宝石だった。ぱっと見水晶っぽいけど、微妙に黒っぽい色を帯びてて、中のほうでなんか光がゆらゆらしてる。

「なんだこれ？ てか、うちにこんなもん、あつたのか」

「ゴメンね、内緒になって言われてたから」

なんでも訊けば、姉貴が万一に備えて、ずいぶん昔に親父から持たされたものらしい。もともとはお袋が、どこから拾ったかして持ってきたんだとか。

「あたしもよく分からないけど、父さんの話じゃ傭兵ギルドへもって行けば、かなりの値が付くらしいの」

「へえ……」

宝石屋じゃなくて傭兵ギルドってことは、なんか戦う時用のモノなんだろう。

「けど、そんなに簡単に金に換えちゃったら、あとで困るだろ？」

「大丈夫よ、あともうひとつあるし、他にもよく分からない秘薬と

「があるから」

「……………」

「そんなに財産あったのか……。」

よくよく訊いてみると、俺が持つてて薬代にしてる宝石類も、元々はその手の良くわかんないモノを換えたらしかった。

用意周到な親父、破格の値が付くヤツはそのまま姉貴に持たせて、それ以外は宝石類に換えて俺に持たせた、ってことらしい。

「使つてあげて。」

「それにどうせ、あたしも使っただろうし」

「分かった」

姉貴がそこまで言うのに、反対は出来なかった。

「んじゃこれから、ギルド行つて換えてくる。ついでに、なんか旨いモノ買ってくるよ」

と、フィアが目を開けた。どうもまだよく寝込んでなかったらしい。

頭を撫でてやる。

「少し出かけてくつから。帰ってきたら、旨いモノ食わせてやっからな」

どこへ行くんだろう、そんな顔をちよつとだけしたあと、フィアは微笑んだ。『いつてらっしゃい』の意味なんだろう。

けど次の瞬間、はっとフィアが表情を変える。
必死に俺のほうへ、手を伸ばそうとする。

「おい、どした？」

フィアの視線を追う。

俺の手の中。

姉貴からもらった、よくわかんない宝石だ。

「これか？」

わずかに、でも必死にうなづくフィアの様子に、俺は宝石を渡してやった。

一瞬光る。

「え……？」

次の瞬間かなり大きいはずの謎の宝石が、綺麗さっぱり消え失せてた。

そしてフィアが肩で息をしながら、ベッドに手をついて起き上がる。

「フィア？」

「ごめんなさい、だいじょうぶ……」

鈴の音みたいなたくき通った声が、はつきり返って来た。

「動けるのか？」

「はい」

まだちよつと辛そうだけど、たしかにフィアはしっかり起き上がった。声も良く出せないほど弱ってたさつきとは、大違いだ。

「こーゆー使い方するもんだったのか」

「いえ、普通はちよつと、違うんですけど……」

なんかよく分からない。

でもフィアが動けるようになったから、他の事はどうでもいい気もした。

「まあいいや、治ったんだから。」

あ、まだ寝てるよ？　ずっと寝てたんだから、急に動いたらまた倒れるぞ」

ともかく一安心だ。

「なんか食いたいものあるか？」

「えっと……」

まだ食欲さほどないらしい。

だとすると、無難にパンとミルクと とか考えてたら、姉貴が口を挟んだ。

「それよりニール、フィアの服が先でしょう？」

「え？ あ……」

そんなもんすっかり忘れてた。

確かに言われてみればフィア、俺のシャツを着せてるだけだった。寝てる間はそれでも構わなかったけど、こうなったらそうもいかないだろう。

けど俺に、そんなもの買えって言われても困るわけで……。

「あゝ、それえーと、明日にでもおばさんに頼んで見繕ってもらって、とりあえず今日はなんか旨いモノ 」

自分でも何言ってるかよくわかんね。

けど幸い、言いたいことは通じたみたいで、2人が笑った。

「そしたらあの、あたし、お湯……」

「だから寝てろって。そのうち元気になったら、やってくれればいいからさ。」

ともかく今日はおばさんも呼んで、みんなで快気祝いだ」

言いながらほとんど無理やり、姉貴とフィアとをベッドに押し込む。

それから隣のおばさんに事の次第を話して、俺は上機嫌で買い物に繰り出した。

第6節

F i a s i d e

まだ、生きてるんだ。

目が覚めるたびに思う。

全く動けないのに、声も出せないのに、ほとんど飲まず食わずなのに、それでもフィアは死なずに居た。

だから思う。もう少し、生きてみようと。

せめて今日は、出来たら明日も、そう思っ
て気づけば数日が過ぎ
ていた。

そのことに自分でも驚く。捨てられた時にはもう、その日のうちに死ぬだろうと、自分でも思っていたのだから。

ただ、良くなるようには思えなかった。残念ながら自分の身体に、
そういう気配は全く見えない。

それでも。

あの助けてくれた彼 ニールと言うらしい が、ことあるごと
にフィアを覗き込んで話しかけ、頭を撫で、スープなどを食べ
させてくれ、励ましてくれる。

それが嬉しくて応えたくて、フィアは必死に生きていた。

この身体では、何も返せない。

それならせめて、「がんばれ」と言う言葉に応えたかった。

館に居た時は、こんなふう
に面倒をみてもらうこと
などなかった。
誰もが自分の身を守るのに必死で、他人まで手が回らなかった。

だからそれしか知らずに育
ってきたフィアには……
この暖かさは
天上にも匹敵するものだったのだ。

まどろみながら、人の気配を感じて目を覚まし、少し相手をしてもらってまたまどろむ。

ファイアが目を覚ますたび、身体が弱いらしいお姉さん　こちら
はイルゼと言った　も、とても喜んだ。

最初はそんなに起きていて大丈夫なのかと、ぼんやりとした頭で考えたりしたが、どうも平気らしかった。話し声を聞いていた限りでは、どうやら振ってわいた妹？の面倒を見るのが楽しくて、体調が良くなったのだという。

それなら尚更と、ファイアも自分を励ます。

もう少し、生きられるところまで。

みんなが、悲しまないように。

だからその時も、話し声で目を覚ました。

ファイアが目を覚ましたのに気づいて、彼が頭を撫でてくれる。

「ちょっと出かけてくつから。帰ってきたら、旨いモノ食わせてやつからな」

言えない『いつてらっしゃい』の代わりのつもりで微笑むと、彼も笑った。

と、視界に入ったものにはっとする。

何かは知らない。見たこともない。

だが、身体の奥底から何かが告げた。『あれ』が必要だと。
必死に手を伸ばす。

指先だけでも触れれば、それで十分なはずだ。本能がそう告げている。

「おい、どした？」

フィアの様子に、彼が気づいた。

「これか？」

必死にうなずく。

不思議そうな表情のままフィアの手に、彼がその宝石を握らせた。

「え……？」

彼の驚いたような声と共に光が満ちる。

心が大きく息をつく。

生き延びた。

全身がそう謳った。

まだ辛い、身体は動く。そのままフィアは、ベッドに手を付いて起き上がった。

「フィア？」

「ごめんなさい、だいじょうぶ……」

久しぶりに、自分で自分の声を聞く。

「動けるのか？」

「はい」

ずっと寝ていたせいだろう、まだ少し辛い。が、それだけだった。動けなかったほんの少し前までとは、雲泥の差だ。

「こーゆー使い方するもんだったのか」

「いえ、普通はちよつと、違うんですけど……」

訊かれて、説明に窮する。

取り込んだ今なら分かるが、これは精霊の類だ。「力ある石」とも言われる。

それでも瀕死の病人が治るとは思えないのだが……自分の場合は、

この石の力が上手く作用するらしかった。

ただ、これが何かも知らない相手に、どう説明したら理解出来るのかと困り果てる。

が、先に彼のほうが諦めた。

「まあいいや、治ったんだから」

結局はそういうことだ。

戦乱の続く今の世の中、過程や理由をとにかく言う人間は少なかった。過程よりも、食べられた、生き延びたという結果の方が重要なのだ。

彼が優しい笑顔を向ける。

「あ、まだ寝てろよ？　ずっと寝てたんだから、急に動いたらまた倒れるぞ」

うなずいて横になると　　実際ずっと起きているとまだ辛い
彼が毛布をかけてくれた。

「なんか食いたいものあるか？」

「えっと……」

ずっと食べていなかったせいかな、さすがにまだ食欲がない。
困っていると、隣からお姉さんが口を挟んだ。

「それよりニール、フィアの服が先でしょう？」

「え？　あ……」

突拍子もないことを言われて、今度は彼が答えに窮する。

「あゝ、それえーと、明日にでも俺……じゃなくておばさんに頼んで見繕ってもらって、とりあえず今日はなんか旨いモノ」

女物の服と言うのが効いたのだろっ。慌てぶりがおかしい。
久しぶりにこんなふうに笑った。そう思いながらフィアは、起き

上がりながら切り出した。

「そしたらあの、あたし、お湯……」

「だから寝てろって。そのうち元気になったら、やってくれればいいからさ。」

ともかく今日はおばさんも呼んで、みんなで快気祝いだ」

じゃあ行つてくると、足取りも軽く出て行くニールの後姿に、フ
イアも嬉しさを覚えながらまたベッドにもぐりこんだ。

第7節

Neil

フィアはあれつきり、嘘みたいに元気になった。半月以上過ぎてるけどなんでもなくて、朝から毎日普通に起きてる。

ただ……料理とかは致命的だ。ぜんぜん任せられない。

あんまりヒドいんで訊いてみたら、一度もやったことないって話だった。それも作つてるとこさえ、見たことないって言う。

もちろん、洗濯その他もしたことないんだとか。

思い出したくないらしくて、ここへ来る前のことはほとんど話さないから、なんでそうなのかはよく分からない。

でもたまに、ぽつぽつ言う話をまとめると、暮らし自体は貴族並だったみたいだ。黒パン知らないし、砂糖とか普通に使ってたっぽいし、上等なお菓子も食べてたらしい。

他にも字が読めて書いて、すごい複雑な計算も簡単にやってのける。俺なんか訊いたこともない詩とかも、すらすら暗誦できる。

あとは刺繍とか。

つまりが、まるつきり貴族の娘みたいな状態だ。

それが病気？になって動けなくなつて、放り出されたつてとこなんだろう。

もっとも俺らに言わせれば、元気になつたし姉貴の話し相手にもなるし、細かい買い物とかやってくれるしで、とりあえずは言う事なしだった。

「こりやすごいねえ、たいしたもんだ」

フィアに売り上げの計算任せてた隣のおばさんが、感心して声をあげてる。

「あとこれに、今日持つてく分で……合わせて2万ルルシ、払ってもらえると思います」

「なんだって！」

こんどは素っ頓狂な声があがった。

「いつもこんだけ持つてくあの親父、1万8千ルルシだって言つてたんだよ。なんてこつたい」

「でも全部で、1万ルルシが1枚と、5千ルルシが1枚、1千ルルシが5枚ですから……」

要するにおばさん、ボられてたらしい。

「つたくあの親父、人が難しい計算出来ないと思って！

今度からあいつのとこじゃなくて、違つとこへ持つてこつかね」
かなり怒ってるし。

「ただ、あそこ安いんだよねえ……」

「幾らなんですか？」

フィアに訊かれて、おばさんが答える。

「この、いちばん小さいのあるだろ？」

当面これだけでよくて、10枚も納めるのにたつた1万3千ルルシだつてんだよ。だからどうもねえ……」

「あの、それ……そっちの方が、単価高いですよ？」

「え？」

さらつとフィアは言つたけど、ここに居る全員、何のことか分かんなかった。

「ええと、今納めてるところは、この小さいのは1千ルルシですよ
ね？」

「ああ、そつだよ」

ここまでは俺でも分かる。

「でも新しいところは、10枚で1万3千ルルシだから、1枚は1

300ルルシですし……」

「そ、そうなのかい!？」

おばさんが啞然とする。

「えーとその、そうすると何かい？ 違うところへ納めた方が、高くなるのかい?!」

「納める数によりますけど……」

俺らが計算苦手だから、フィアも説明が難しいらしい。

「もし、新しいところに小さいのを18枚納めたとしたら……2万と400ルルシになりますから」

「そうだったのかい……」

つまり、単にボられてただけじゃなくて、徹底的にボられてたっぼい。

「小さい方が、やっぱり作るのは早いんだよねえ。」

このいちばん大きい1枚やる間に、10枚近く出来るんだ。中くらいのと比べても、5枚は出来るし」

「それだと……この大きいのを1枚と中くらいのを2枚作る間に、小さいのは20枚近く出来ますけど……」

「……」

さすがのおばさんも絶句する。

「まるつきり向こうの方が、楽で儲かるとはねえ。」

あの強欲親父め!」

俺も思わず、横から口を出す。

「おばさん、いつそ卸し先変えちまえよ」

「ああ、明日これ納めたら、変えることにするよ。」

そうそう、今日のスープはさっき、そこのかまどに置いといたからね。後でお食べ」

言って暗くなり始めた廊下へ、おばさんが出てく。と、今度は入

れ替わりに、近くの鍛冶屋のおっさんが入ってきた。

第8節

「すまんが、フィアちゃんヒマかね？」

「あ、はい」

フィアが振り向いて立ち上がる。

「その……なんだ、もし時間があつたらこの手紙読んで、返事書いてもらえんかね？」

「はい、すぐ読みますね」

最近人づてに伝わつたらしくて、読み書きが堪能なフィアのところへは、ちよくちよくこうやって手紙とかが持ち込まれてた。

フィアも役に立つのが嬉しいのか、それともモトからお人好しなのか、イヤな顔ひとつしないで引き受ける。

ただ、それだとまるつきりタダ働きなワケで。

鍛冶屋のおっさんに囁く。

（あとでフィアに、小遣いくらいはやってくださいよ？　じゃないと、コイツ働きに出さないとならないんで）

（分かつとる分かつとる、心配すんな）

俺らのヒソヒソ話には幸い、フィアは気づかなかつたらしくて、そのまま手紙を読み始めた。

「えつと、親愛なる兄上へ。うちのいちばん下の娘の結婚が決まりました」

めでたい話らしい。

フィアの声を背中で聞きながら、かまどに火を入れる。

「フィアちゃん、すっかりいいみたいね」

「ああ」

姉貴も起きてきて、その辺を手伝い始めた。

「それにしてもあの子、前はどこにいたのかしら？　読み書きも計算も上手だし」

「言わねえからなあ……」

当人が言いたがらないのに、ムリヤリ聞き出すわけにもいかないし。

「ま、なんでもいいんじゃない？　今はここにいるんだしさ」

「それもそうね」

話しながらパンとチーズ切ってスープかき回して、ついでに買ってきた果物並べて、肉を包みから出してみる。

「あら、今日はご馳走じゃない」

「親方がさ、小遣いくれたんだよ。これでフィアに、いいもの食わしてやれって」

なんでも話じゃ、昨日近所へお遣いに出たフィアが、親方のおかみさんが野良犬に噛まれそうになったとこを助けたらしい。

「意外とすごいのねえ、あの子」

「俺もそれは思った」

間に割って入って睨みつけたら逃げてったっていうけど、それにしたってたいしたもんだ。

ちなみにフィア自身は、野良犬撃退したあと、こっそり帰っちゃまったらしい。おかみさんがその辺の人に話を聞いて初めて、誰だか分かったんだとか。

「鍛冶屋のおっさん帰ったら、隣のおばさん呼んで、みんなでこの肉食べようぜ」

「おばさんなら、さっきまでここにいたじゃない」

何を馬鹿なことを、姉貴の視線がそう言ってる。

「マジでご馳走あんの、忘れてた」

フィアの計算技に氣い取られて、すっぽり抜け落ちたってやつだ。

姉貴が笑う。

「ホント、いつもながらそっかしいんだから。今のうちに知らせてくる。おばさんが何か食べちゃったら、もったいないでしょ」

姉貴が暗くなった廊下へ出てく。

向こうじゃ代筆が始まったんだろう、鍛冶屋のオヤジがフィアとなんだか、話す声が聞こえ始めた。

しばらくそれを聞いてから、肉を切り分ける。

「えーと、塩……」

姉貴がすぐ帰って来ないのは、行った先でおばさんと話し込んでんだろう。

まあ、こないだまで起きてるほうが珍しかったの思えば、ずいぶんいいってやつだ。

と、影が差した。

「ん？ フィア終わったのか？」

「……うん」

俺らにだいぶ慣れたらしくて、フィアの口調は前に比べて、かしこまったところがなくなってきた。

ただ性分なのか、エラく大人しくて内気だ。今だって俺の隣で、なんか言いたそうなのに黙って立ってる。

「どした？」

埒あかないからこっちから訊いたら、フィアが手を差し出した。

「あの、これ……」

手のひらに乗ってたのは、小銭だ。きつとさっきの鍛冶屋の親父に、もらったんだろう。

「良かったな、小遣いもらったのか」

けどこいつ、動かない。

「あの親父に、なんか言われたのか？」

そう訊いたら、フィアはふるふると首振った。

消えそうな声で、やっと言い出す。

「あたし……働いてないから、これ……」

「悪りい、聞いてたのか」

こいつの手に、俺はその小銭を握らせた。

「ああ言わなきゃお前このまま、いいようにコキ使われちまうとおもってさ……ゴメンな。」

金のことは気にすんなって。お前の食いぶちくらい、どうにでもなる」

「でも……」

泣き出しそうな顔でまだ言ってるフィアに、俺は返す。

「だから、気にすんなって。」

お前、ここんちの人間だろ？　なのにそんなこと気にして、どうすんだよ」

ついでに、姉貴もお前のおかげで元気になったって付け加えたら、今度こそフィアが泣き出した。

どうすりゃいいんだ。

泣いてる女の子の相手なんて、俺したことないわけで……姉貴あれで意外と強い強くて、泣いてんの見たことないし。

どうすることもできないで、とりあえず頭を撫でてみる。

え？

悲しみ、諦め、喜び、安堵、そういういろんなもんが、俺の中に湧き上がった。

いや、違う。

俺自身は混乱してパニックってるだけで、これは　フィアのだ。
今まで一言も言わなかった、こいつの想い、辛さ、そういったモノが流れ込んでくる。

同時に、以前何があったのかも。

「そんなん、ナシだろ……」

言葉が口をついて出た。

締め付けられるような辛さと諦めに、思わずこいつを抱き寄せる。

ナシだ。こんなん、ぜったいナシだ。

なのにこいつは誰を恨むでもなく、ただ諦めてどこまでも透明で……。

かける言葉が見つかなかった。ヘタな慰めなんて、届くようなものじゃない。

だから何も言えなくて　けど俺が何か言うより先に、こいつの方が先に涙ぐんで顔を上げた。

そして、言う。

「ありがとう……」

まだ泣きそうな顔で、でも極上の笑顔で。

「だから、いいんだって」

「うん」

今度は落ち着いたらしくて、ホントの笑顔を見せる。

「さ、メシにしようぜ。姉貴とおばさん、呼んできてくれっか？」

フィアのヤツはもう一度微笑んでうなずくと、身を翻して外へ出て行った。

第9節 異変

F i a S i d e

ふと、夜中に目が覚めた。

何かが、来る。

辺りは月明かりが照らし出していた。

見慣れた天井。

ここへ運ばれて来てから、どのくらいになっただろう？ もうひと月近いだろうか？

考えたことのないほどの、幸せ。

だがそれは……今日までかもしれない。

つ、と涙がこぼれた。

何も要らなかった。今のままでじゅうぶんだった。なのになぜ、たったそれだけのことが、許されないのだろうか？

鎧戸の隙間から入り込む風が告げる。“それ”が来るのだと。

同じベッドの中、隣にはニールの姿があった。

自分が連れて来られてからしばらく、ニールは自分のベッドは明け渡して、その辺の床で寝ていた。

だがどうしても1人で寝ているのが怖くて怖くて、動けるようになってからはつい彼の毛布に潜り込んでしまい、今は2人で一緒だ。

こうやって隣でしがみついて、眠れるだけで良かったのに。

なのに、それさえも……

ひとつため息をついて、彼をそつと揺り起こそうとして、驚く。

「なんだ、お前も目、覚めたのか」

寝ぼけているのではない。ニールはもう、はつきりと目を覚ましていた。

「悪いけど、起きて支度してくれるか？ 俺、姉貴起こして言いかけた言葉が途切れたのは、姉のイルゼが部屋に姿を見せたからだ。」

「ニール、起きてる？」

彼女はもう、すぐにでも出かけられる格好だった。

「姉貴さすがだな。」

フィアももう起きてつから、すぐ動けると思う」

「良かった。貴重品まとめておいたから、半分持つててね。あたし、おばさん起こしてくるから」

誰も、どうして、などと訊かない。

訊く必要などなかった。それはもう……すぐそこだ。悪しきもの。忌むべきもの。

逃げた方がいい、そう本能が告げている。

「どうせ荷物なんて、大してないしなあ。鍋惜しいけど。」

あーフィア、これ持つか？ お守りにしかなんないかもだけど」
そう言っただけが差し出したのは、きれいな装飾が施された短刀だった。

確かに、お守りにしかならないかもしれない。

「刃見せるだけでさ、ビビるヤツけっこういるし。」

つか、俺から絶対離れるなよ？ はぐれたら最後、何されるかわかんねえから」

「……うん」

答えながらフィアは、違うことを恐れていた。

何かが、自分の中で牙をむこうとしている。
仮面を投げ捨て、本来の姿を現そうとしている。

自分が何者なのか分からない恐怖。

あのまま助からず、路地裏で朽ちたほうが良かったかもしれない。
一瞬浮かんだそんな思いを、フィアは振り払った。
目の前に立つ、彼を見上げる。

「どした？」

「うっん……なんでも、ない」

それはただの、偶然だったのだろう。ほんの少し何かが違えば、
あの路地裏で会うつことさえなかったはずだ。

だが奇跡は起こり、自分はいまこうしている。

それなら。

これから何が起こるか、フィアは漠然とだが感じ取っていた。

ああ見えてニールは、剣が使える。深夜や早朝、剣の稽古をして
いるのを、フィアは知っていた。「離れるな」という言葉は嘘では
ない。

だがそれでも、対処しきれないだろう。来るのは……そういうも
のだ。

だからフィアは自分に誓う。この内なる恐ろしいものを、彼を守
るために使おうと。

隣が騒がしくなって、イルゼが部屋へ戻ってきた。

「一応起こしたんだけど、おばさんまだ時間がかかりそうね……。
何がどうなってるのか分からないから、仕方ないんだけど」

「俺、ちと行って説明してくる」

入れ替わりにニールが出て行き、女性2人が残された。

「フィアちゃん、急に起こして悪かったけど、大丈夫？」

「あ、はい。目が覚めてましたから……」

あら、と彼女が小さく声をあげた。

「すごいわね、ちゃんと気がつくなんて。

でもこれからが本番だから、気をつけてね」

「はい」

隣からは、まだ動く気配が感じられない。

危ない、と思った。本当にもう、時間がない。同じ事を感じているのだろう、イルゼも焦り始める。

「まったくもう、2人とも何やってるのかしら」

と、外でどおんと言う何かが爆発したような音と、たくさんの悲鳴とが上がった。

「来た、ってワケね」

ひ弱で線が細いとばかり思っていたイルゼの雰囲気、一変する。それまでまどろんでいた野生の肉食獣が、目を覚ましたようだった。病弱ゆえに体力は続かないだろうが、その点は子供のフィアも同じだ。だがどちらも、見かけに騙されて手を出せば、痛い目に遭うだろう。

2人の視線が交錯して、互いに相手が助けを必要としないことを確認する。

「にしても、遅いわね。これじゃ逃げ遅れかねないじゃない」

気が急いて待ちきれなくなったころ、ようやく隣でドアの開く音がした。

こちらもすぐに外へ出る。

抜け目のない表情を見せるニールと、大変なことが起こったことだけは理解したらしい、怯えた隣人とがいた。

「姉貴、どこ回る？」

「先生のところしかないと思うけど」

先生と言うのは、あのいつも来ている医者先生だろう。ここからは遠くないらしいが、フィアは実際に行った事はなかった。

「やっべ、来てる。行くぞ」

ニールに手を引かれて階段を駆け下りる。

阿鼻叫喚。

一目見て凶暴さが分かる大きな魔物たちが、貧民街のそこかしこで暴れていた。

第10節

「マジやべえな……」

逃げ惑う人々。

片手で幼子の手を引き、もう片方の手に赤ん坊を抱いた母親を、格好の獲物と見たのだろう。一気に魔物が迫った。

かぎ爪が振り上げられる。

だがそれが振り下ろされるよりまだ早く、風のようにファイアが間に割って入った。

残像のように、ふわりと舞う長い髪。透き通った瞳が、魔物を睨みつける。

瞬間、魔物の振り上げられた腕が、音を立てて弾けとんだ。

苦しげな咆哮。

魔物の血走った目が、母子からファイアへ移る。

だが彼女は全く怯まず、華奢な手を魔物に向けてかざした。

金属の触れ合うような、不思議な音。

辺りの気温が一気に下がる。虚空から何本もの氷の槍が現れ、魔物へと飛ぶ。

声にさえならない絶叫。

天へ憎しみを吼えようとした姿のまま、魔物が瞬時に氷像となる。魔物の足をファイアが蹴ると、巨体は傾いて地に落ち、澄んだ音を立てて砕け散った。

「すごいわね、やるじゃない」

イルゼが感嘆の声を上げる。

「俺らの方が、足ひっぱりそうだな」

ニールも苦笑した。

その反応に、フィアはほっとする。

考えるより先に身体が動き、魔法を繰り出し、敵を屠る。

屈強な戦士ならともかく、自分のような子供がそんなことをしたら、いったいどう見えるか。それをフィアは承知していた。

なのに思わぬ事態でとっさに動いてしまい、内心びくびくしていたのだ。

嫌がられるのではないかと。

何をつまらないことを、という人もいるだろう。だがフィアは、それが怖かった。

あの思い出すのも嫌な場所でならまだともかく、やっと見つけた居場所を失くしたくなかった。

だから杞憂に終わったことに、心の底から安堵する。

「さ、お母さん早く。ほら、おばさんも！」

イルゼが幼児を抱き上げ、茫然自失の母親と隣人とを急かす。

「行きましょ、こっち」

促されて小走りに移動を始めたあとは、早かった。可能な限り敵をやり過ごし、襲われればフィアとニールとが手早く倒す。

どうやら人も魔物も町の中心部、貧民街と本来の町とを隔てる城壁の方へ向かっているようで、郊外へ向かう一行が出会う数は進むにつれ減っていった。最初に、一番外側からやられたせいだろう。

この調子では城壁周辺は地獄絵図だろうが、まさか戻って助けるわけにもいかなかった。

そのまま町を出て、ニールに導かれて近くの丘へ急ぐ。

「もう、ほとんどいないみたいね」

「だな」

人が大して居ないせいなのか、偶然狙われなかっただけなのか。
ともかく見上げる丘の上　大した高さはないが　の屋敷は血な
まぐささとは無縁で、静かなままだった。

第11節

「ここがだいじょぶで良かったぜ」

麓にある錆び付いた門をくぐりながら、ニールがつぶやく。

「……良かったって、大丈夫じゃなかったらどうするつもりだったのよ」

「んなこと言っただって、姉貴が先に言ったんじゃないか」

些細な姉弟の言い合いを、別の声が押しとどめた。

「イルゼとニールかい？」

聞き慣れた、ドクターの声だ。

「無事で良かった、ここから町を見て心配していたんだ」
屋敷と同じで、彼も何事もなかったようだった。

「街は……やっぱりひどいのかい？」

「ええ」

ドクターの問いに、短くニールが答える。

「そうか……」

僅かな間視線を落とした後、ドクターは顔を上げて軽く微笑んだ。

「とりあえず、屋敷へ行こう。疲れてるだろう？」

言いながら丘の上へ続く道を、たどり始める。

辺りは暗くて今ひとつ見えないが、どういいうわけか庭園ではなく、畑のようだった。案外ここで、自給自足の生活をしているのかもしれない。

ドクターが長い長い坂を上って、一行を屋敷へと先導する。

「ボロ屋敷だが、外よりはマシだろうしね」

館は確かにやたらと古びていて、幽霊屋敷さながらだ。

だが貴族の住まいだけあって広いし、痛んでいるとは言え貧民街よりはずっと立派だった。

「にしてもここ、よくヘーキでしたね」

ニールが不思議そうに言うと、ドクターが笑いながら肩をすくめた。

「度を越した心配性のご先祖が居てね。莫大なお金をかけて、土地ぜんぶに強力な結界を施したんだそうだ。

まあおかげで助かったんだから、今度からよく敬わないとだが」
嘘から真、という話らしい。

「ロクなお茶もないが、飲んでゆつくり休むといいよ。
僕のほうはじき、忙しくなってお茶を淹れる間もなくなるだろうしね」

確かに魔物の襲撃が一段落すれば、ここは怪我人であふれ返るだろう。

そんな話をしながら、一行が屋敷の中へ入ろうとした時。

悪寒を覚えて、ファイアは立ち止まった。

振り返る。

「どした？」

気づいたニールの声に、他の面々も足を止める。

「月、が……」

「月？」

振り仰いだ空には、気味の悪いほどに緋い月。

「なんだ？」

「月に、橋……」

うわごとのように、フィアの口から言葉が漏れる。

「橋？　なんだそりゃ？」

「聞いたことがあるな……」

ドクターが腕を組んで考え込んだ。

「たしか100年に一度、月と地上のあいだに橋がかかって、それを渡って魔物が地上へ落ちてくるって話だったと思うんだが」

「それ、シャレにならないですよ……」

そんな会話を続ける一行の視線の先で、天空から伸びた霞む何かと、地上から伸びたものとが繋ぎ合わさっていく。

「どう、なるのかしら」

イルゼがつぶやく。

これから何かとてつもなく大変なことが起こるのは分かるが、それがどんなものか、誰にも想像がつかなかった。

第12節

Neil

「おい、あがつていいぞー」

下のほうから親方のデカイ声がする。

「あ、はいー」

答えて俺は荷物の山から降りた。

あれから数日。あの橋とやらは今んとこ、それ以上何もない。

夜は不気味だけど。

月が昇ってくると、ぼんやりした橋が夜空に見える。

でもそれだけだし、そんなことより食うほうが先だから、俺初めみんなどっか働き口見つけて働いてる。

街は、マジでヒドかった。

聞いた話じゃ俺らが抜け出した後、かなりヤバいことになったらしい。魔物と炎とに追われた連中が市街への城門へ押し寄せたけど、市民連中が門を開けるわけない。

けっきょく最後は魔物が門を破って中まで入っちゃった　ザマ　みろってんだ　らしいけど、そいつらが通り過ぎた後は死体の山だったっていう。

貧民外で助かったのは桁外れに運が良かった連中と、どうにか港方向へ逃れられた連中、後は俺らみたいにいち早く街を捨てたヤツだけだった。

焼け落ちた街の中を通って、港へ向かう。

市場のあった広場は今、家なくした連中の住み場所になってて、物の売り買いとか出来ない。

ただ遅いもので、ほとんど無傷だった港には翌日から船が出入

りしてるから、そこでみんな働いたり売り買いしてた。どうにか難を逃れて、先生の屋敷に身を寄せた連中も、ほとんどが港で働きだしてる。

「やな言い方だけど、貧民街の被害が大きかったせいで、港とかの荷運びはワケわかんねーほどの人不足だ。だから五体満足で働けるヤツは、いくらでも働き口があった。」

「親方？」

「おう、来たか。」

「嬢ちゃんも偉えなあ。あんまムリしねーでいいかな？ 途中でもなんでも終わりにするんだぞ？」

「親方、その猫なで声ヤメてくれ。鳥肌立つ。」

「えっと、あの、大丈夫です……」

「律儀に答えるこいつもこいつだし。」

「この親方、あの晩はとうとう最後まで気がつかなかったっていうからスゴすぎる。酒かっくらって船の上で寝てたらしいけど、朝になつたら街が丸焼けで、酔いがいつぺんで醒めたってた。」

「おかみさん　こないだフィアが助けた人だ　の方も、あの晩は運良く隣町の親戚の家に行ったとかで、夫婦そろって難逃れしたっていう。」

「だから翌日俺が顔を出したら、この騒ぎで同業が死んじまったって嘆きながら、港の荷降ろし作業を一手に引き受けてた。」

「当たり前前って言えば当たり前前だけど、その場で俺も捕まって働かされたし。」

「オマケで、一緒に来てたフィアまで捕まった。」

「自分でわざわざ捕まった、っても言うだろうけど。」

「荷の計算してたヤツもあの晩亡くなっちまったらしくて、親方が」

困った困った言ったら、フィアが自分から名乗り出ちゃった。

「でもこいつのことだから、下向いて消えそうな声で、「簡単な計算なら出来る」って言ったただけけど。」

「どっちしても、計算がちゃんと出来るヤツってのは数が少ないから、その場で親方に雇われた。」

「おい、フィア、テキトーなところで終わりにして帰んねーと」

「あ、うん」

「律儀なフィアを、仕事から引き剥がしにかかる。」

「ずっとやってるとキリねーし、みんなの帰りも遅くなっちゃうぞ？」

「あ……！」

「どんな時でも他人優先のフィアには、この手の説得がかなり効く。」

「そうだぞ嬢ちゃん。」

「どうせ嬢ちゃんのことだから、仕事自体は終わってんだろ？ ほら、暗くならんうちに帰んな」

「だから親方その猫なで声、気色悪いってば。」

「ともかくフィアが手を止めて、どうにか帰る体制になった。」

「ほれ、今日の働き賃だ。」

「ほら嬢ちゃん、小遣いもあげような。あと、土産ももってくとい」

「だ、だから親方あ……。」

「ニール……？」

「親方の猫なで声にアテられて脱力した俺を、フィアの透き通った瞳が覗き込んだ。」

「だいじょうぶ？」

「あ、へーきへーき、気にすんなって」

大丈夫じゃないとか、言えるワケない。

「さ、今度こそ帰るぞ」

「うん」

フィアと連れ立って、壊滅しまくった街を抜ける。行き先は当たり前だけど、ドクターの屋敷だ。

時間が合わなかったのか、屋敷から来てる他の連中の姿は見えなかった。

丘へ続く道を、並んで歩く。

「おい」

「あ、ドクター」

麓の門の辺りで、ドクターと姉貴とに出くわした。

「仕事、いいんですか？」

「いやあ、さすがに疲れてね。迎えを兼ねて散歩さ」

今、屋敷は怪我人だらけだ。

なんせあの騒ぎだったし、しかも普通の医者には貧乏人なんぞ診やしない。

つか、診てもらっても金払えないし。

そんなわけで、運良くここまでたどり着けた怪我人で、屋敷はあふれてる。

もちろん一緒に逃げた隣のおばさんとか付き添いとかが手伝ってるけど、治療は一手に引き受けてるわけだから、ドクターの仕事ったら半端じゃないはずだ。

で、抜け出してきたってことらしい。

姉貴はまあ…… よーするにオマケでついてきたんだろう。

「仕事はどんな感じ？」

「ちつと忙しいけど、いつもどおりだからな」

答えたら睨まれた。

「あなたに訊いてないわよ。」

フィアちゃん、疲れてない？」

姉貴ひでえ。

けどだからって、ストレートに怒れないのも辛いところだ。フィアが気にするし、つかこいつが大事にされるの、俺も嬉しかったりするし。

「さ、1日分の話があるのは分かるけど、戻ったほうがいい。話は歩きながらも出来るしね」

ドクターに促されて、みんなで歩き出す。例の屋敷は丘の上だから、延々上り坂だ。

第13節

「ドクター、今度はもつと平らなどこに家建てたらどうです?」

「そうだねえ。だが、眺めはいいんだよ?」

くっだらな話しながら歩いてく。ただドクターの言つとおり、半分過ぎた辺りから、眺めは抜群に良かった。

さつきまで厚かった雲が切れてきて、薄布みたくなる。それが沈んだ陽の残りに、うつすら照らされてた。

広がる薄紫の空と、紫紺の海。

「海だけ見ると、なーんもなかったっぽいにな」

「そうよね……」

そのとき、フィアが小さく声を上げた。

「どした?」

「あれ……」

フィアが指差す。俺らが見てたのとは違う、もちよつと夜に近い南の空だ。

「あれがどした?」

暗くなりかけた空にうつすら、あの夜からの橋が見える。

気になることは気になるけど、まあいつもの話だ。

けど、それをドクターがさえぎった。

「待て、様子がおかしいぞ」

呆然と見てるうち、橋が縮まって光りだす。流れ星っぽくも見えた。

「なんかこつち……来てない?」

「来てつかも」

早い話、流れ星がこっちに向かって落ちてくるみたいなお状態だ。しかもだんだん、真つ赤な火の玉になってく。

「なんかこれ、ヤバく……ねえ？」

「まずいだろうねえ」

なんでドクター、そんなに落ち着いてんですか。

平然としてるドクターに、そんなことを思う。

「これってやっぱ、逃げたほうがいいんじゃない？」

「そりゃ逃げたほうがいいだろうけど、でも、いまさらどこへ？
すぐ来ると思うんだけど」

姉貴も落ち着きすぎだろ。

そんなアホなこと言ってる間に、燃える“それ”がどんどん落ちてくる。

「あー、あれなら海かな、行き先は」
だからドクター、なんでそんなに平然と……いや、海ならいいけど。

「海なら、別になんでもないのかしら？」

「どうだろうねえ。あれがどのくらいか分からないけど、さすがに何も無しじゃ済まなそうなんだが」

また物騒なことをドクターが言う。

「お魚、だいじょぶかしら？」

姉貴、魚の心配してるばあいかよ。

そして、閃光。

沖に巨大な火柱が上がった。

「すげえ……」

これしか言いようがない。

と、ふわりとフィアが前へ出た。

重さを全く感じさせない、風のような動き。

「フィア？」

海を見据えたまま、こいつが何かを口にする。

きいん、という耳鳴りに似た音を立てて、俺らの周りの空間が軋んだ。

「何やったんだ？」

答えはない。

不思議に思いながらも、そのまま火柱を見続ける。

「え……？」

気が付いたときには遅かった。なんか靄っぱいものが見えたと思った瞬間、街が瓦礫になって舞い上がる。

ほとんど同時に周りの草がちぎれて吹き飛んで、木が何本か根こそぎ倒れた。

それから届く轟音。

ただ、俺らの周りは風さえなかった。

よく見ると、いろんな破片が見えない壁みたいなのに、弾かれてるのが見える。

フィア。

それしか考え付かなかった。

こいつがいち早く、なんか手を打ったんだろう。じゃなきゃ今頃、俺らも吹き飛んでたはずだ。

そのうちやっと、風が収まる。

「館、だいじょぶかしら？」

「うーん、ボロだからねえ。ちよっと自信がないな」

あんまり心配してなさそうな顔で、ドクターが言う。

と、フィアが前へ出た。

「フィア、どした？」

俺らの言葉は無視して、こいつが宙へと浮く。

「お、おい?!」

何か言いたそうな、どっか痛そうな表情で一瞬だけ振り返って、次の瞬間フィアは文字通り飛翔した。

姿がたちまち闇にまぎれて、見えなくなる。

飛び去った方向は、海だ。

「どういう、こと……?」

姉貴が呆然とつぶやく。

けど俺も、何がどうなってるのかさっぱりだ。

ただみんな、フィアが飛び去った方向　遙か沖を見つめる。
その沖に、白い線が引かれた。

「　なんだ、あれ?」

この街へ来てから海はずっと見てるけど、こういうのは初めてだ。

「あれは　!」

気が付いたドクターが、血相変えた。

「津波だ!」

「津波……?!」

見るのは初めてだけど、話に聞いたことはある。

でもそれ、地震の時とかだったような……。

考え込みながら眺めてる間に、線は信じらんないスピードで近づいてきて、たちまち湾に差し掛かって高さを増した。

「あれじゃ、街が!」

ただでさえ爆風で半壊してんのに、あんな壁みたいなものも来たら、全部流されるのは確実だ。

でも、どうしようもない。絶対っていいくらいなんも出来ない。

つか、もしかしたらここだってヤバイ。

齒噛みしながら、波が押し寄せるのを見つめる。

けど。

「うそ、でしょ……」

遠く聞こえる姉貴の声。

津波が、全部じゃないけど消えた。

第14節

F i a

分かつていた。

あの夜、魔物が町を襲ったときから、逃れられない災厄が起こる
と感じていた。

それが、来る。

「なんかこれ、ヤバく……ねえ？」

「まずいだろうねえ」

どこかちぐはぐな調子で続く会話を背に、フィアは自分の中へ意
識を向ける。

「これってやつぱ、逃げたほうがいいんじゃない？」

「逃げたほうがいいと思うけど、でも、いまさらどこへ？　すぐ来
るんじゃない？」

この人たちを、死なせたくない。だから。

何かが止めたが、構う気はなかった。

力は、ある。

「あー、あれなら海かな、行き先は」

「海なら、別になんでもないのかしら？」

「どうだろうねえ。あれがどのくらいか分からないけど、さすがに
何も無しじゃ済まなそうなんだが」

使ったことはない。

だが、使い方は分かる。

力を汲み上げて、形にする。

閃光。

遠い海に文字通りの火柱が立つ。

「すげえ……」

ニールの声を聞きながら、前へ出た。

海を見据えたまま、知らないはずの呪を口ずさむ。

きいん、という耳鳴りに似た音を立てて、周りの空間が軋んだ。

「何やったんだ？」

聞かれたが、フィアには答えられない。そもそも、どう説明すればいいのか分からない。

分かるのは、これが必要だということだけだ。

“それ”が、来る。

風が揺らぐ。

次の瞬間、街が瓦礫になって　そして一部の人も　空へ舞い上がった。

海を渡ってきた衝撃波が襲ったのだと気づいたのは、どのくらいいただろう？

張った魔法の盾の外側を、暴風が荒れ狂う。草が千切れ飛び、枝が折れ、木もなぎ倒された。

しばらくの間それは続いて……やっと、収まる。

だが、これで終わりではない。

魔法の盾を解きながら、フィアはさらに前へ出る。

「フィア、どした？」

心配そうな言葉には答えず、少女は虚空へ　踏み出す。
軽々と舞い上がる身体。

「お、おい?!」

ニールの声に、一度だけ振り向く。

なんと答えたらいいか分からず、言葉にはならなかった。涙がこぼれて、それをこらえながら、海の上を翔ける。

こんなこと、したくない。

きつと怖がられて、嫌われるから。

それがフィアの思いだった。

けれどやらなければ、全員死ぬだろう。

だから……。

沖に引かれた白い線が、近づいてくる。

立ちはだかるには、フィアはあまりにも小さい。

だが。

己の裡から呼ぶ。

力の源、巣くう物。

同化していくのが分かる。

あとは簡単だった。

押し寄せる津波から力を引き抜いて、湾の入り口に防壁を張り、さらにエネルギーの流れも固定化する。

手の振りも呪文も要らない。視線だけで、粘土を捏ねるより簡単だ。

突然進む力を失くした波が、崩れ落ちて渦を巻く。

けどそれさえも吸収されて変換されて、自らの力で作り出された見えない壁を、ただ洗うだけだった。

それを眺めながら、防壁をチェックする。

状態から見て、夜中までだろう。

急ごしらえのため、ずつとは持たない。だがこれだけ持てば、大

丈夫なはずだ。

そう思った瞬間、フィアはめまいを感じた。これだけのことを一気に、しかも初めてやったのだから、当然といえば当然だった。

どこか安全な場所に、そう思って辺りを見回して、思い出す。

どこへ行けばいいのか。

本当はニールのところへ戻りたいが、彼の顔を見るのが、フィアは怖かった。

もし、恐れられて嫌われていたら？

行かなかったからといって、嫌われなかったことにはならない。だが、行かなければ見ないですむ。

いちばん安全な場所はこの辺りでは、ドクター先生の館がある丘だと分かっていたが、フィアはもっと手前の町の外に降りた。

身体が重くて立つてられず、道端にうずくまる。

意識が、暗闇に堕ちていく。

ニールに、会いたかった。そう思いながら。

「おい、こんなところで寝たらダメだろ！」

とつぜん、耳元で響いた声にはっとする。

やっこの思いで目を開けると、いちばん見たかった姿があった。

「ムチャ、したんだろ」

まっすぐ顔を見られなくて、フィアは視線をそらす。

「先生が言うには、この調子ならとりあえず、とりあえず津波はだいじょぶだろってさ。」

さ、帰ろうぜ」

動けない少女を、少年が背負う。

不思議なくらいの暖かさを、
フィアは感じた。

第15節 招聘

Neil

フィアはまた、何かと寝込むようになった。

つても、最初よりはずっといい。あんなふうになつたく動けないわけじゃなくて、ちよつと起きるとすぐ疲れて、つて程度だ。

原因は……あの津波の時のことで、間違いないだろう。

いま居るのは丘の裏側の、ドクターの別邸だ。

丘の上にあつた館のほうは、あの爆風で半壊した。町を追われて身を寄せてた人たちも、かなりの数が巻き込まれて、怪我したり亡くなつたりしてる。

ともかく住めるような状態じゃなくて、仕方なく俺たちはあそこを捨てた。

ここは向こうよりかなり狭くて、同じくらい荒れ果ててるけど、まだ住めるだけマシだ。いまじゃ町のほうも、住める場所なんてほんの少しになつてる。

貧民外は、文字通り壊滅。町の繁栄を担つてた港も、爆風でやられた船の残骸とか、そういうのがあつて使えない。城壁に守られた市街の一部が、どうにか生き延びた感じだった。

すべてが動かなくなつて、町の人間のかなりが、領主からの配給で食いつないでる。

「この町に、いつまで居られるのかな」

「そうねえ……」

ドクターが駆り出されて居ないあいだに、姉貴とこれからのことを話す。ずっと厄介になるわけにもいかないし、何よりこつこつこ

とになった町は、先行きがたいていヤバイ。

港さえ動き出せば、まだ荷が来るからどうにかなりそうだけど、見通しは立ってなかった。

そついうのを考え合わせると、ここを出るって選択肢も、十分ありそうだ。

「隣町とか、噂じゃどうなの？」

「ここよりマシだけど、それでもこないだの爆風で、だいぶ被害出てるってさ。」

そこへこの町からけっこう避難民が行ったんで、摩擦起きてるらしい」

どこの町だつて、新参者つてのは歓迎されない。俺らが故郷捨てたあとここに落ち着いたのも、この町がここらじゃいちばん大きくて、新参者をそれほど嫌わなかったからだ。

加えて天災で被害が出るんじゃ、町にも余裕なんてあるわけがない。

穩便になんていくわけなかった。

「だとすると、ここでどうにかやってくか、どこかもっと大きいところへ行くかよね」

「もつと大きいって姉貴、それいちばん近いの王都だぞ？」

王都つてだけあつて、この国でも最大だけど、代わりに軍やなんかも最大規模だ。ほかに古くから下町を牛耳ってる連中もいるとか、あんまりいい噂は聞かない。

「それにさ、いまフィア動かせねーし」

弱ってるのに引越しとか、よけい悪くするだけだ。

ともかくしばらくは様子見て、それから考える。それ以外にやりようがないだろう。

そのとき、乱暴に戸が叩かれた。

「誰かいらないのか！」

言い方といい叩き方といい、何か横柄だ。

顔を見合わせてから、俺らは急いで戸を開けた。

「王立、軍……？」

外に居たのは、白く輝く鎧の一团だった。甲冑の胸に燦然と輝く王国の紋が、所属と権威を物語ってる。

「ノエアド伯爵の住まいに相違ないか？」

ノエアドってのは、ドクターの名前だ。

「はい、そうです。でもこの主人は、いま出かけておりまして……」

姉貴が答える。

「さようか。だが今日は、伯に用ではない。ここに年のころは十ほどの女の子が、いると聞いたが」

フィアのことだ。

どう答えようか迷っていると、鎧の一团の間から、上等な服を着た初老の男が前へ出てきた。どこかで見たことある顔だ。

「君らはなんだね？ 物取りではなさそうだが 小間使いか？」
いきなり神経逆撫でするような事を言う。

「私たちは先日の騒ぎで家を失くしまして、ここで世話になってる者です」

さすが姉貴、冷静だ。

「そうか。ならば入らせてもらおう」

けどエラそうな態度で、強引に入ってこようとする。

「ちょっと待てよ、あんた誰」

「無礼者！」

耳がどうかなりそうな大喝とともに、白鎧に突き飛ばされた。

「よいよい、下々がこの顔を知らぬでも、やむを得まい。ここの領主、ドムイヌじゃ。忘れぬようにな」

ここの領主って言えば、たしか国王に近い血筋の人で、貴族の中でもトップクラスの有力者だ。それを考えると、かなり気さくな人なんだろう。

けどこの言い方とか、悪意なく見下されてる感じだった。

「して、ここに娘御はおるのか？ 先日津波を食い止めた、巫女の末裔がおりと聞いたのだが」

「巫女の、末裔……？」

何のことだか分からない。でも、フィアに関係あることなんだろう。

第16節

「あの、何のことか、分かりかねます」

姉貴が正直に言ったら、周りの白鎧がいきり立った。

「何を言う、きさまらきちんと答えよ！」

それをまた、領主とやらが制す。気さくなだけじゃなくて、温和な人でもあるらしい。

「そんなに騒ぐでない、テアドよ。下々が話を知らぬのは、致し方ないこと。」

そなたら、この世界の成り立ちは知っておるか？」
考え込む。

たしか子どもの頃聞いたのは、むかしむかしカミサマとやらがいて人間を作ったけど、気に入らなくて滅ぼそうとした。でも人間は戦って地上を手に入れて、天と地は行き来できなくなった、って話だ。

それを言ってみる。

「そうじゃ。無学なわりには、よく知っておるではないか」

この人は褒めてるつもりなんだろうけど、ものすごく嫌味な言い方だ。

「して少年よ、教えておこう。そのさらにむかし神代の時代に、神の代理人たる神官と、巫女とがいたのだよ」

やっと巫女がなんなのかを理解する。

「言い伝えでは、巫女は強大な力を持っておったという。また娘御は、あの津波を食い止めたという。」

巫女の末裔に相違なかるう。ほかにあのようなことが出来る者、おるとは思えぬ」

何かヤバい気がした。

フィアが何か力を持ってるのは、間違いない。けどそれは俺にとっては、別に怖くもなんともなかった。あいつはそういうことはない。

ただ、俺にはその程度のことでも……ほかの連中にはたぶん違う。現にあれだけ良くしてくれた隣のおばさんや、貧民街の人たちは、フィアを避けてた。

出かけた先でいつも言われる。助かった、感謝してる、でもあの娘が怖いと。そして申しわけなさそうな顔で、なけなしの中からお礼と称して何かをくれて、そそくさと立ち去るばかりだった。

そんなフィアに、目をつけるヤツがいたとしたら？

この目の前の、見たとこ温和そうな領主が、それを考えてたとしたら？

「それで、娘御は奥か？ 入らせてもらうぞ」

ずかずかと一団が入ってくる。

およそ貴族の別邸とは思えない荒れた室内を、領主が見回して面白そうに言った。

「ノエアド伯はこだわらぬと聞いておったが、話以上じゃな。若いのに酔狂なことよ。」

そのの者たち、巫女の末裔の部屋まで案内

「

領主の言葉が途切れる。

何ごとかと思っただろう、出てきて姿を見せたフィアに、来た連中の誰もが息を飲んだ。

「これが、巫女の末裔……」

淡い色の髪。透き通った瞳。白磁の肌。

「神の力を受け継ぐ、というだけのことはあるの。なんと美しいことよ」

これだけは素直な賞賛。

と、領主が恭しくファイアに一礼して、言った。

「巫女の末裔よ、お迎えにあがりました。国王陛下よりの招聘でございます。

陛下は巫女様をぜひ王宮へ迎え入れ、国の護りとして丁重にもてなしたいと仰っております」

「え……」

予想もしなかった話に、ファイアが戸惑う。

「さ、巫女様こちらへ」

領主がファイアの手を取る。

「いやっ……」

それを聞いた瞬間、俺は動いてた。領主の手を払いのけて、ファイアを後ろにかばう。

「きさまっ！」

次の瞬間、何かが閃いて本能的に動いて 衝撃。

焼けたような熱さ。それから激痛。

「ニールっ！」

ファイアと姉貴の叫び声が遠く聞こえる。

「ほう、ぎりぎりとはいえ避けて急所を外すとは、大したものだ」
血のついた剣が振り上げられる。

「お願い、やめてっ！」

ファイアの後ろ姿が、俺の視界をふさいだ。

あれ？

フィアの姿と床の傾きで、いつの間にか倒れてたことに、やっと気づく。

「そこをお退きください、巫女様。こやつの数々の無礼、さすがに捨てて置けませぬ」

「やめて、お願い！ 行きます、いっしょに行くからやめて、殺さないで！」

そんなこと言つなと言いたいののに、声が出ない。動けない。身体が冷えていくのが分かった。

「では巫女様、こちらへ」

「待つて、ニールに手当てを……」

何か人が動く気配がして、誰かが俺を覗き込んだ。

「傷が深くて、手持ちの道具では応急手当しか」

「それで良い。巫女様の希望だ、ともかく叶えて差し上げる」

俺の身体の向きが変えられる。

その視線の先に、フィアが歩いてきた。

「ごめん……」

その瞳には、涙。

泣かせたくなかった。

なのに、声も出ない。

「あのね、これ……」

フィアが、助けたときからかけていたペンダントを外して、俺の手に握らせる。

そして、身を翻した。

「巫女様、お早く」

ペンダントと血の足跡を残して、フィアは去った。

第17節

F i a S i d e

王都は、遠かった。

あれからどのくらい経ったのか、とうに日を数えることをやめてしまったフィアには、もう分からない。がたがたと揺れる寝台の上で、ニールに生きていてほしい、それだけを願いながら空を見る毎日だった。

あそこで応急手当だけはしたのだから、生きているはず。ずっとそう、自分に言い聞かせている。

ほんとうは、すぐにでも帰りたかった。ニールのそばに居たかった。だが恐れていた自分の内なるものは、予想もしなかった結果を生み、周囲を傷つけてしまう。

だから……帰れない。

やがて揺れが収まり、人影が覗いた。

「巫女様、お加減はいかがですか？」

声をかけてきた男性に、フィアはちいさくうなづく。

「失礼いたします」

侍医役を務めている部隊の医務官が入ってきて、熱をはかり、脈を取る。

ただでさえ弱っていたフィアを、この旅はさらに痛めつけた。

よほど急いでいたのだろう、最初は足の速い走竜の背に、直接乗ってだった。が、半日と起きていられないフィアはすぐに倒れてしまい、一行は慌てて竜車を用意した。

だがそれに座しての旅もフィアは耐えられず、いったん途中の宿場へ逗留し、改めて極上の寝台車が用意された。今はそれに乗せら

れて、ゆつくりと進んでいる。

柔らかな毛が厚く詰められた寝台は、どこか当たったりということはない。上掛けも選りすぐりの羽毛や羽根が使われていて、軽く暖かだ。

しかしそれでも、フィアには辛い旅だった。

揺れる寝台は落ち着かず、ゆつくりと休めない。昼も大半は横になって過ごしていた少女には、これは厳しかった。

ただ、揺れかたは前よりいくぶん小さくなっている。それだけ整備された道に來たのなら、そろそろ王都が近いのかもしれない。

「何か、召し上がりますか？」

問いに対して首を振る。無理やりの長旅に加え、連れ出されたときのニールの件も手伝って、いまはほとんど食べ物が喉を通らなかった。

「ですが、何か召し上がりませんか……果汁でも、いかがですか？」
言いながら医務官はそつとフィアを起こし、背にいくつものクッションをあてがって、寄りかけられるようにする。

「さ、どうぞ」

最初から飲ませる気だったのだろう、後ろにうやうやしく盆を捧げ持った小姓が居た。

吸い飲み　コップはすでにムリ　が口にあてがわれる。それを少しづつ、やっと半分だけフィアは飲んだ。

それだけで疲れてしまって、朦朧としてくる。

「巫女様？」

医務官に呼ばれたのは分かるが、答える気力はもうなかった。
何度か呼ばれたが、そのうち諦めたのだろう。身体がそつと横にされ、またがたがたと寝台車が揺れ始めた。

まどろみながら、想う。路地裏で拾われ、初めてまともに扱われた日々を。

幸せだった。

とりたてて何もない、だからこそ幸せな日々。

もう戻れないと知りながら、戻ることを夢見ている。こうしてまどろんで目を開けたら、またニールの顔が目の前にありそうな気がする。

彼の名を想った瞬間、ずきりと胸の奥が痛んだ。

自分のせいで、ニールは死んだかもしれない。生きていると信じているが、それはただの幻想かもしれない。

せめて、それだけでも分かれば……。

寝台車は何度か止まることを繰り返し、ついに王都に入ったようだった。車輪の立てる音にかき消されがちだが、それでも都会独特の喧騒が聞こえてくる。

元いた町はどっちだろう、とフィアはぼんやり思った。

たしか「王都は西」と言っていたから、東へずつと行けば、帰れるのだろうか？

「巫女様をお連れとな？」

「はっ、さようであります」

何か話し声が聞こえてくる。

「早馬で話は聞いていたが……ほう、なんと美しい」

たぶん誰かが覗いているのだろうか、まぶたを持ち上げる力もなかった。

それからしばらく、周囲のやり取りは続く。

と、それに慌しさが加わった。

「陛下のお成りです！」

誰かがフィアを、そつとゆする。

「巫女様、目をお開けください。陛下がお見えです」

うながされて、フィアはやつとの思いで目を開けた。目の前に筋骨隆々の、豪奢な身なりの男がいる。

「なるほどたしかに美しいが、ずいぶん弱っておるな。これはどういうことだ？」

男が言つと、周囲の人間が平伏した。

「その、長旅が祟りまして」

「さようか。いずれにせよ、これはならぬ。どうにかせよ」

「はっ……」

誰もが頭を垂れる。

この人物が自分と、その力を欲したのだと、やつとフィアは理解した。

なぜこんなものを欲しがるか、と思う。差し出せるくらいなら、今すぐ差し出したいくらいだ。

昔から奥にくすぶるこの力は、フィアにとっては恐怖でしかなかった。

いつ牙を向くか分からないもの。

いつ自分を食い尽くすか分からないもの。

見ぬ振り、気づかぬ振りをして、ずっとやり過ごしてきた。だからもう動けなくなったとき、心のどこかでほつとしていた。もう、向き合わなくてすむと。

だが結局、逃れられなかった。

身体が持ち上げられる。

「巫女様、いまお部屋へ」

その連れて行かれた部屋で、何を要求されるのだろうか？
怯えながらも、フィアは従うしかなかった。

第18節

I l z e s i d e

ニールの傷は深かった。医務官が手当てしてくれたおかげで生きてはいるが、予断を許さない状況だ。

「ニール……」

そつと触れる。

弟は、眠り続けたままだ。もしかしたら二度と、目覚めないかもしれない。

手にはあのペンダントを、握り締めたままだった。最初取ろうとしたのだが、どうしても放そうとせず、諦めた。

なぜこんなことに、と思う。

フィアが悪いわけではない。むしろ、可哀想な子だ。得体の知れない部分はたしかにあったが、それを誇示するでもなく、ただふつうに暮らせることをあの子は喜んでいた。

そのフィアを可愛がっていたニールが、とつさに前へ出たことも、責められることではない。誰でも身内や大切な友人が連れ去られそうになれば、ああするだろう。

けつきよく自分たちのような者は、泣き寝入りするしかないのだ。あの白鎧の仕打ちにも、フィアを連れて行かれたことにも、意を唱えること自体が許されない。

それどころか、自分たちは破格に恵まれているほうだろう。ふつうの者ならこんなことになっても、手当てしてもらえなければ医者にかかることもない。そのまま野垂れ死ぬのがオチだ。

運良く上層に生まれなにかぎり、そういうものだった。

「様子はどうだい？」

呼び出されて、仕方なく町へ出ていたドクターが、戻ってきた。
「おかえりなさい。ニールは……相変わらず」
上手く言葉にならない。

ドクターは外套をかけると、手際よく弟の傷を診始めた。

「傷そのものは、それほどでもないんだが。熱も持っていないし。ただ、かなり血を失くしたからね」

実際はもっと酷いはずなのだが、気遣ってそう言ってくれているのだろう。いくら素人のイルゼとはいえ、そのくらいのことはさすがに分かる。

「やっぱりもう、ムリかしら」

彼女の言葉に、ドクターがはつとした表情を見せた。状況を理解していることに、気づいたらしい。

「この子に、何もしてやれてないの……」

父親も亡くなり身寄りがなくなってからは、この弟が働いて支えてくれた。

寝込みがちな自分と違い、弟は病気ひとつしたことがないほど丈夫だ。身体も年より大きく、年齢を偽って働いていた。両親の残してくれたお金を、たいして使わずにやってこれたのは、すべてニールのおかげだ。

だから彼が、連れてきたフィアに惹かれてると気づいたとき、イルゼは一も二もなく賛成だった。いつまで生きられるか分からない姉などより、違うものを見て欲しかったのだ。

なのに……こんな結果になるとは。

「死んだら、どうしよう」

「大丈夫、死なせないよ」

言葉の強さに驚いて、イルゼは顔を上げた。

「きみの大事な弟を、死なせたりしない。それに万が一働けなくなっても、ここに居ればいい」

「え……」

言われた言葉を理解して飲み込むまでに、時間がかかった。

「でも、それじゃ、ドクターが」

「構わないさ。ただ、見てのとおり贅沢ができないけどね」

視線が合う。

だがそのとき、ドアが叩かれた。

先日の件を思い出して、思わずイルゼは身を硬くする。

ドクターが用心深くドアに寄り、返事をした。

「どなたです？」

「旅の者です。武器は持っていますが、使うつもりはありません」

言葉に続いて、金属の触れ合う音がした。ドクターが小さな覗き窓から、外の様子を確かめる。

「武器を手放してるな。敵対する気はなさそうだ」

「でも、隠してたら」

自分でも疑いすぎだとは思うが、心の底からは信用できなかった。これ以上、何かあつてほしくない。

「ドア越しでも構いませんので、お話を聞かせていただだけませんか？」

これには驚く。

「何かする気は、本当になさそうだね」

「ええ」

荒っぽい用事なら、ドア越しということはさすがにないだろう。

もういちどドクターが覗き窓から外を見る。が、次の瞬間彼は大きくドアを開けた。

「ドクター？」

イルゼの困惑をよそに、彼はおもてへ歩み出る。

「その魔法医のかた、お願いです。こちらに重体の患者がいるのですが、診ていただけませんか？」

言葉を失う。医者が医者に頼むなど、前代未聞だ。自分の腕が足りない、言うに等しいのだから。

逆に言うならそんなプライドを捨ててでも、ニールを助けようとしている、ということだった。

「お礼でしたら、何とかします。ですので、お願いしたいのですが」「お礼などは要りません。我々に話を聞かせていただければ十分です。あとできれば、全員中へ入れていただければ」

一瞬ドクターが考え込んだが、すぐに彼は答えた。

「分かりました、みなさまどうぞお入りください」

この言葉に、一行のリーダーらしき人物が目配せし、後ろのほうから魔法医が歩み出る。

「患者はどちらに？」

「この奥です。剣で急所ぎりぎりを突かれて、かなり失血しています。あとは魔法しか手がありません」

二人が話しながら、奥へと消えた。

第19節

入れ替わるようにして、一団が部屋へ入ってくる。

つい警戒したイルゼに向かい、一行のリーダーは気さくに話しかけてきた。

「お若いが、立派なかたですな」

「あ、はい」

先日の白鎧たちとは、少々違うようだ。

「失礼ですが、こちらの奥方ですか？ それとも妹君でしょうか？
ともかく、椅子にかけてたほうがいいのでは？ だいぶ顔色がお
悪いですぞ」

「あの、でも、お客様が立っているのに座れません」

イルゼがそう返すと、一行の誰もが優しい笑みを見せた。

「我々は慣れているので。」

けれどあなたは、だいぶお疲れのようだ。遠慮せずに座ってくだ
さい」

再度勧められて、イルゼは腰を下ろした。正直なところ、立っ
ているのは辛かったのだ。

「奥に、怪我人がいるようですが」

「はい。私の……弟です」

一行の間に、軽い驚きが走った。

「それはなんとも……ですが、なぜ？」

もつともな疑問だった。庶民が兵に剣で突かれるのは、滅多にあ
ることではない。

イルゼは少しの間迷ったが、彼らに事の顛末を話した。フィアを
守ろうとして傷つき、彼女は連れ去られてしまった、と。

「遅かったか」

思いもしなかった言葉に、ついオウム返しに聞き返す。

「遅かった、とは？」

「言葉どおりです。もちろん、我らの予想が正しければ、ですが、できればその少女のことを、詳しく聞かせてもらえませんか？」

乞われて、イルゼは話し始めた。路地裏に捨てられていたこと。

とても弱っていたこと。不思議な石を手にしたとたん、元気になったこと。街を魔物が襲ったとき、魔法で退けたこと。荒れ狂う風から、自分たちを護ってくれたこと。そして、津波を食い止めたこと

……。

「間違いありません」

「ああ、まず間違いないだろう」

話を聞いた一行が、囁き交わす。

「あの、いったい何が」

不安になったイルゼが訊ねると、こんどは一行のリーダーが話し始めた。

「フィアというその子は、おそらく我々の一族に言い伝えられている、“人の守り手”です」

「ひとの、まもり、て……？」

初めて聞く言葉だった。

リーダーがうなずいて続ける。自分たちの一族には、災厄から人々を守る者が、生まれると言われているのだと。

「じつを言えばほんの十年ちょっと前まで、誰もがそれはただの言い伝えだと、思っていたのです。」

ある日、何かが囁き出すまでは」

聞けば十年ちょっと前のある日、一族の占い師が一斉に、「守り手が生まれる」との暗示を受けたのだという。それは誰がどんなカードを引いても、どんな香を焚いても、すべて同じだった。「それでも当時は、薄気味悪く思うものがある程度でした。ところが十年前、一族のものが全員同時に、守人が生まれたと感じたのです」

さすがにこれは何かある、そういう話になり、守人探しが始まった。

言い伝えでは守人は、一族の中に生まれるという。それなら最近生まれた子どもの誰かだろうと、片っ端から調べて回ったそうだ。「けれどみな違いまして。

散々悩んだ挙句、一族を捨てた誰かの子かもしれないということになって、搜索が始まりました」

だがそれでも見つからず、いい加減諦めかけていた折に、今回のファイアの話を目にしたのだという。

「それで、この家に？」

「ええ」

津波を止めた少女なら、何かあるに違いない。そう思って訊ねてきたのだそうだ。

「一步、遅かったようですが」

本当にそうだと思う。ほんの少し早く来てくれれば、ニールもファイアもこんなことに、ならなかったかもしれない。

そこへ、魔法医が戻ってきた。

「どうした？」

「いま出来ることは、すべてしてきました。ですが、霊液が足りません」

魔法医の話ではニールは、いま急に死んでもおかしくないほど、

危なかったらしい。

「その場で応急手当がされたのと、そのあと医師が続けてきちんと診ていたために、どうにか生きていられたのでしょうかね」

今は魔法で強引に、命を繋ぎとめているのだそうだ。ただそれはあくまでも「繋ぎとめている」だけで、治すには至らないのだという。

「治すには特殊な結界を張り、その中にしばらく居ないとなりませんが、その結界を描くときに使う霊液が……」
それがなくては、どうにもならないらしい。

「インクが何かで代用できないのか？」

「ペンのインクと、いっしょにしないでください」

つまり、ダメなのだろう。

「なら、家の者に持ってこさせては？」

「その間に、あの少年が死にますよ。」

ともかくこの街の魔道士ギルドに行って、掛け合ってきます。ただこの被災状況だと、使いきっている可能性が高いので、手に入るかどうかは」

八方ふさがりということのようだ。

要するに、その霊液とやらがあれば、いいのだろうか……。

「あっ！」

思い出して、思わず声を上げる。

第20節

「どうされました？」

「その、使えるかどうかわかりませんが、見ていただけませんか？ 両親の残した秘薬が何種類か、あるんです。その中に、もしかしたら」

遺産の秘薬を取り出して、並べてみせる。

ひとつひとつ検分していた魔法医の手が、止まった。

「あつた！ これならどうにか使えます」

魔法医が喜びの声をあげ、ニールの部屋へ戻っていく。その背へイルゼは、思い切って声をかけた。

「あの、私も行っていいでしょうか？」

邪魔になりそうな気がして遠慮していたのだが、やはり弟のことが心配だ。

「脇で見ているだけなら、大丈夫ですよ。どうしても困る場合は言いますから、そのときだけ出していただければ」

「すみません」

部屋へ入るとすぐ、魔方陣を描く作業が始まった。先ほどの秘薬と魔法医の手持ちを合わせて、インクのようなものが作られ、それで部屋の床に紋様が描かれていく。

「一区切りついたら言いますから、ベッドを中央に移してください。そのあと、残りを描きますので」

作業が着々と進み、ニールが寝たままのベッドが動かされ、さらに周りが描かれた。

最後に、全員が部屋から追い出される。

「結果内によけいな人が居ると、上手くいきません。ドアは開けて

おきますから、見ていてかまいませんよ」

言つて、魔法医が長い長い呪を唱え始める。

それに反応して、床に描かれたものが徐々に光りだし、呪が終わるとともに霧散した。

「どうぞ、もう入って大丈夫です。この結界は、出入りは自由ですから」

おそろおそろ入って、弟のそばまで行く。

先ほどまでとは違って、頬に少し赤みが差していた。

「しばらくすれば、目を覚ますでしょう。」

ただ、起きられるようになってからも、しばらくはこの中に居てください。短時間なら結界から出ておかまいませんが、なるべく早く戻るようお願いします」

魔法医がいろいろと注意する。

「動けるようになれば、もういいのでは？」

「それがダメなんですよ。」

あれほどのケガで、弟さんは生命力を使い切っています。それをこの魔方阵は、戻す力があります」

つまりここに居れば、癒されていくのだろう。

「ですが外へ出てしまうと、生命力は生きているだけで削られていきます。それがまだ、弟さんには致命的なんです。」

完全に元に戻るには、最低でも半月はみてください。できれば1ヶ月は」

魔法医の言葉に改めて、どれほど危険だったかを思い知る。

「気をつけたほうがいいことを、あとで書いておきますね。」

おや？」

部屋を出ようとした魔法医が、足を止めた。

「これは？」

視線の先は、ニールの手にあるペンダントだ。

「ファイアが……いえ、連れていかれた女の子が、持っていたものです。最後に弟に、渡していきました」

「なるほど」

握り締めて放さないそれを、魔法医が調べる。

「ああ、やはりそうですね。」

これは私たちが慈悲石と呼ぶ、癒しの効果がある珍しい石です」
「じゃあ、それで死なずに？」

言ってから、しまったと思う。ニールが死なずに済んだのは、何人も医者に関わってくれたおかげだ。

さすがに自己嫌悪に陥ったイルゼの肩を、誰かが叩いた。

「きっとそうだろうね。」

本当に、いつ死んでもおかしくなかったんだ。ファイアの慈悲石がきつと、ニールの命を支えたんだろう」

いつの間にか隣に来たドクターが、優しく言う。

「私もそう思いますよ。正直手当てをしながら、いつ心臓が止まるかと、ひやひやしていましたから」

魔法医も口を揃え、医師二人にフォローされたイルゼは、ますます恐縮した。

そこへ、まったく別の声がかかる。

「私にも、見せてもらえないか？」

一行のリーダーだった。

「あ、はい、どうぞ。ただあの子、握っていて放さないんです」
「よほど大事なんでしょうな」

言いながらリーダーはベッドに近づいて、しばらくの間ペンダ

トを眺めたあと、自分の懷をまさぐった。

取り出されたのは　やはりペンダント。

石の大きさも、台座も、鎖も、それどころか細工までが、まったく同じだ。

「これは……？」

「私のは、母の形見ですよ」

それと同じということは。

「母には、一族を捨てた妹がいたそうです」

その言葉が、すべてを物語っていた。

「本当に、もう少し早ければ……」

そうすればフィアは無事この一行に保護され、ニールも怪我をせずに済んだのかもしれない。

第21節

「その少女は、王都へ連れて行かれたのですよね？」

「はい」

まさか王国軍を名乗り、陛下の名を騙っていた、ということはないだろう。

「でしたら我々は、これから王都へ向かいます。いろいろと話を聞かせていただいて、助かりました」

「え、でも、私たちは何も。それどころか、弟まで治療していただきました。せめて、何か」

言いかけたイルゼを、一行は制す。

「あまり時間がありません。早く王立軍を、追いかねばなりませんから」

こう言われてはそれ以上言えず、慌しく発つ彼らを、見送るだけだった。

走竜の背にまたがる彼らの姿が小さくなり、丘の陰へ消える。

「中へ入ろう。あまり風に当たらないほうがいい」

ドクターに言われて、部屋へと戻る。

ニールは、前よりはだいぶ良さそうだった。あれほど顔色も悪くないし、触っても冷たくない。

「よかった……」

安堵しながら手を伸ばしかけたとき、弟が小さくうめいて、薄く目を開けた。

「ニール！」

「あね、き……？」

かすれた声で、だがしっかりとそう答える。

「まだ起きないで。死ぬところだったんだから」
「死……？」

目が覚めたばかりで、記憶がはつきりしないのだろう。ニールはぼんやりと考え込む。

だが次の瞬間、彼の表情が変わった。

「姉貴、フィアは？！」

やはり、と思った。弟にとってフィアは、既にそういう存在だ。だが、答えられない。

ニールは黙ってしまった姉の様子と、手にしていたペンダントから、状況を察したようだった。

彼の表情が沈む。

「あのね、ニール」

少しでも気休めになればと、イルゼは先ほどまでいた、一行のことを話す。

「じゃあ、フィアのヤツは……」

弟の言葉に、彼女はうなずいた。

「人の守り手というのが、なんなのかはよく分からないけど。でもあの人たちのところに生まれていたら、とても大事にされてたと思うわ」

本当に、気の毒な子だと思う。

今ごろ、どうしているのだろうか？

ただでさえ弱っていたのに、行った先で酷い扱いを受けていないか、それだけが心配だった。

あの一行に引き取られるか、せめて大事にされていてほしいのだが。

「ともかくあなたは今は、身体を治さない」と

「ああ……」

答えるニールの表情に、イルゼは不安を感じた。

弟は……行ってしまうのではないだろうか？

いや、行くのは構わない。こんな姉の面倒を見続けるより、もつと自分のしたいようにするべきだ。

だが、治りきらないうちに出て行ってしまいそうで、それが気がかりだった。

「ドクター、呼んでくるわね。何か食べたいものある？」

「んー、のど渴いたな」

「分かった、何か持ってくるから」

そう言つて、ドクターを呼びに行く。

ついでに自分の心配事を、ドクターに伝えるのも忘れなかった。

「そうか、確かにその可能性はあるな。気をつけないと」

ただ、何をどう気をつければいいのかは、二人にもよく分からなかった。

目を離さなければいいのだろうが、現実にはムリだ。ドクターは先日の惨事で街に大量の怪我人が出ているため、何かと呼び出される。その間はイルゼが留守番だが、常に見張っているわけにはいかなかった。

要するにニールがその気になれば、いつでも隙を突いて、出て行ってしまうのだ。

「ともかくあの子に、部屋を出たら危険なこと、よく言っておかなくちゃ」

「そうだね」

どれほどの効果があるかは分からないが、言えば魔法医の言っていた半月くらいは。そのときのイルゼは、どう思っていた。

ニールの回復はめざましかった。翌日には起き上がれるようなり、翌々日には立てるようになった。

今はもう、日中はほとんど起きている。

「よかった、良くなつて。でもほんとに、ここから出ちゃだめよ？」
「分かつてるつて。俺も死にたくねーもん」

平然とそんな軽口まで叩く。

「それより姉貴、雨だいじょぶか？　なんか降りそうじゃん」

「あ、いけない。今のうちに洗濯物、入れておかないと」

今にも雨が落ちてきそうな曇り空に、慌てて外へ出る。

洗濯そのものは、ドクターとの共同作業だった。ほんとうならぜんぶ自分でやりたいのだが、長時間力仕事をやっていると、倒れてしまう。

それが申しわけなくて、イルゼは極力、こういったことをやるようにしていた。

陽の匂いとまではいかないが、乾いたシートや何かを、順番に取り込んでいく。

「これでよし、と」

まとめて入れた洗濯力ゴを持って戻り、イルゼは奥へ声をかけた。

「ニール、何か少し食べる？」

答えはない。

嫌な予感。

慌てて部屋へ行くと案の定、ニールの姿はなかった。

机の上にあの、貴重品が入った袋が置いてある。それと、たどたどしい「ゴメン」の文字。

「ばっ！」

言い捨てて、外へ飛び出す。
だが、ニールは見つからなかった。

第22節

F i a s i d e

何も変わらない、フィアはそう思った。

ニールに拾われる前、あの思い出したくもない館にいた頃と、大した差はない。貸し出されないのだけは良かったが、自由がないのはいっしょだ。

窓辺にある椅子にかけ、遠い空を見る。

「ニール……」

思うのはそればかりだ。

それまでのどことも違う、自分を自分として扱ってくれた場所、人。この期に及んでなお、帰りたくてたまらない場所。

ただ身体のほうは、王宮へ来てからだいぶ良くなった。王の命令ということもあるのだろう、高価な薬湯や魔法薬が惜しみなく使われ、起きていられるところまで回復している。

下を見ると、たくさんの人でごったがえしていた。

数日前を思い出す。あの日はまだ立つのがやっとで予定の謁見は出来ず、王が部屋へ出向いてきた。そして王に抱かれてバルコニーへ連れ出され、集まっていたたくさんの人々に、「この国の守り神」と紹介されたのだ。

そんな力、ないにも関わらず。

眼下から沸き起こった、うねりのような歓声を覚えている。それはあまりにも熱狂的で、恐怖を感じるほどだった。

若くたくましいこの国の王は、野心家だ。

前王の頃からこの国は拡張の一途で、周囲の小国を滅ぼし、あるいは吸収してきた。それは今の王にも受け継がれ、さらにスピード

を上げている。

自分をここへ連れてきたのも、その一環だということを、フィアは理解していた。昨日、王に呼ばれて行ったときも、その話だった。

何ごともストレートな王は、フィアにそのものずばり言った。「軍の先陣に立つて、敵を一掃するように」と。

出来るわけがない。

何かを護ることに使うならまだいいが、何かのために壊し殺すことなど、フィアには出来なかった。あの津波のときも、ニールとその姉やドクター、そういった人や街を守りたかったただけだ。

だから「力などない」と、首を振ったのだが……王が納得したようには見えなかった。側近が何か耳打ちしてその場は収まったが、不穏なものを感じる。

このまま何も起こらないでほしい、そんなことを考えるフィアの耳に、ドアをノックする音が届いた。

「どうぞ……？」

「巫女様、失礼します」

遠慮がちに、だが毅然と、男性が部屋へ入ってきた。たしか王の側近で、文官だ。

「陛下がお呼びです」

この城で王に逆らうのは、不可能と言っている。渋々ながらもフィアはうなずいて立ち上がり 危うくよろけて倒れそうになった。

「巫女様？」

問いかけた文官に、うなずいてみせる。侍女がその様子に人を呼び、けつきよく抱かれて移動した。

だが移動する道筋に、何か嫌な冷たさを覚える。

「あの、どこへ？」

「城の広場ですよ」

なぜ広場なのだろう、そう思いながら連れて行かれた先に、王と側近たちが待っていた。

「巫女様、昨日と答えは同じですか？」

「え？」

側近の言葉に、何のことか分からずに訊き返す。

「この国に、協力する件です」

「それは……」

Yesと答えられず、視線をそらす。

「そうですか。これ以上逆らうなら、仕方ありません」

そんな言葉が聞こえた瞬間、王の隣にいた武官のこぶしが動いた。避ける間もなく、お腹に重い衝撃が走る。

薄れる意識の中で思い出す。この国の王は若く野心家だけでなく、ひじょうに気が短いという話を。

昨日は側近が何か言ってくれたので穩便に済んだだけで、王が満足する結果を出さない限り、遅かれ早かれこうなったのだろう。

いや、最初から何かするつもりで、そのために昨日を穩便に済ませただけかもしれない。

なぜ。

その言葉が頭を占める。

人はそれほどまでに、すべてを手に入れなければならないのだろうか？

そのためには、どうやっても出来ないことの拒否さえ、許されないのだろうか？

何かがぷつりと、切れた気がした。

次に目が覚めたときは、広場の中央だった。

視界に違和感を感じる。それに身体が上手く動かせない。何より、熱い。

何とかならないかと手や足を少し動かしてみても、フィアはようやく気づいた。

自分が縛り付けられていることに。

高い柱の上部に、がっちりとくくりつけられている。

ちょうど足の高さに作られた、台の上に立たされているので、吊り下げられて苦しいということはない。だが後ろ手にされた手はもちろん、胸から下には何ヶ所も、きつく縄が回されていた。自由なのは、首から上くらいだ。

加えて足元で、積み上げられた薪がくすぶっていた。

血の気が引くのを感じながら、周囲を見回す。

自分を見上げる王と、何ごとかを観衆に叫ぶ側近の姿が目に入っ

た。

「この娘は自分を『巫女の末裔』と偽り、王へ取り入った。

神話の時代より伝わる『巫女』は神聖なものであり、これを汚すことは許されない！ また王に取り入り、この国を揺るがそうとしたことも大罪である！」

合わせるように、周囲から罵倒の聲が飛ぶ。ほんの数日前、歓喜の声をあげたことも忘れて。

いや、忘れていないのかもしれない。だからこそ逆に、狂ったような罵声を浴びせ、野次を飛ばし、この様子を楽しんでいるのかもしれない。

王と目が合った。その表情が語る。『我が物にならないのなら、他国に利用される前に処分する』と。

起こることすべてに諦めで対処してきたフィアの心に、何か違う
ものが入り込む。

薪にまとわりついていた炎が、一気に燃え上がった。

焰が高く舞い上がり、長い衣の裾を舐める。立たされている台が
焼け始める。

「いや……」

初めての、抵抗。

衣の裾に炎が燃え移る。

「いやあああつ！」

光が奔り、炎もろともすべてが吹き飛んだ。

第23節 再会

Neal

「王都が、壊滅？」

あと一息で王都つてとこにある宿場町の、貸し走竜の小屋で、俺は思わず聞き返した。

「ああ。二日前の話だよ。とつぜん何もかも吹き飛んだとかで、かなりの人が逃げてきてる」

だから王都へ行くなら走竜は貸せない、ってことらしい。

貸し走竜は、この国ではちょっと大きな町や宿場ならどこにでもある、よく知られたシステムだ。俺みたいな旅人はお金払って、走竜と特殊な魔法の手綱を借りて、次の目的地まで乗っていく。

たまに行方をくらまして走竜を盗もうってヤツもいるけど、魔法の手綱の効力がそんなに長くない。しかも切れると、走竜が暴れ出すようになってる。

「王都の貸し竜舎は跡形もないっていうし、かといってここからじや、王都と往復するほど効力は持たないしね。戻る前に暴れ出してしまつよ」

盗難防止のためだから、走竜の暴れはハンパじゃない。殺すしかない、っていわれるほどだ。

「すまないね」

「いえ、大丈夫です」

ここでゴネても仕方ない。

姉貴やドクターに悪いとも思いながらも、別邸を出たあと、俺は貸し走竜を乗り継いでここまで来た。急ぎたかったのと、さすがに歩いてくのは自信なかったからだ。

そうやってやつと昨日の夕方、王都の近くまでたどり着いたところだった。

で、今朝また借りていよいよ王都へと思った矢先、さっきの話だ。

一昨日起こつた騒ぎなら、昨日にはこの宿場にも報せが届いてたはずだ。ただ俺は夕方ここへ着いてメシもそこそこに寝ちまつたら、知るチャンス逃したんだろう。

ともかく立つててもしょうがないから、歩き出す。ただひさびさに荷物背負って自分の足で歩いたせい、思ってたよりキツイ。

王都からここまででは、歩くと半日くらいの距離だ。けどこの調子だと、日暮れ前になりそうだった。

街道は、意外に人の姿があつた。走竜や自分の背、荷台なんかに荷物をいっぱい持つてる人が多い。たぶん王都に親戚がいるとか、そういう人たちが様子を見に行くんだろう。

その人たちに混じって、黙々と歩く。

逆方向から来る人たちにも、けっこう会つた。こっちはみんなボロボロで、荷物を持つてる人のほうが少ない。

「リヤノ、リヤノじゃないか！」

「兄貴！」

少し先で声が上がつた。向こうから逃げてきた人とこっちから向かつてた人が、上手く行き会つたらしい。

「心配で、食べ物を持って行くところだったんだ。無事だったのか！」

「ああ、うちはみんな無事だよ。公開処刑に行かなかったおかげで、助かつたんだ」

なんか物騒な言葉が聞こえる。

「隣は夫婦で公開処刑見に行つたつきり、行方知れずだよ」

「人様の死にざまをわざわざ見に行ったりするから、バチが当たったんだろう」

俺は思わず声をかけた。

「あの、何があったんですか？」

俺に視線が注がれる。

「あんたも誰か、王都に知り合いがいるのか？」

「兄貴、いま王都へ向かう人で、そうじゃない人居ないと思うぞ」

「それもそうか」

突っ込まれて、兄貴が頭掻いた。

「王都で何がって、どこから言えばいいかなあ」

弟のほうが、考え込みながら話し始める。

「ともかく公開処刑で火あぶりがあるって話で、けっこうみんな見に行っちゃってさ。けど俺そいうの苦手なんで、行かなかったんだ。

それで開始の鐘がなったと思ったら、わりとすぐ、いきなりぜんぶ吹っ飛んじまったんだよ」

王都に居た人たちも、よく分からないほど、とつぜんだったらしい。

「王城はぜんぶ、崩れちゃったってさ。俺の家からでも、塔とかなくなっちゃったの分かったから、ホントだろうな。」

広場はいちばん酷くて、でっかい穴しか残ってなかったらしいし、最大クラスの古竜が大暴れしたとかくらの、ものすごい状態みたいだ。しかもそれが一瞬でっていうんだから、どんだけ被害がでたかなんて、想像もつかない。

「でもなんで、そんなことに」

「ぜんぜんわかんねえよ。でもウワサじゃ、公開処刑のせいだろう

って」

知り合いに会えてほつとしたのもあるんだろう、この人熱っぽい調子で、どんどん喋る。

「公開処刑か……。それにしても、火あぶりつてのは相当だな。いったい何やらかしたんだ？」

「それも、よくわかんねえんだよな」

ほんとに、いろんなことが謎のまんまみたいだ。

「何日か前にお触れがあつて、『巫女の末裔』さまとやらが、この国に来たつて。お披露目があつたんだ」

出てきた言葉にはつとする。

「あの、それで？」

「え？ ああ、それで何日かしたら、こんどはそれがウソだったつて。だからそんな大罪人は、火あぶりつて話だった」

フィアのことだ。

フィアをムリに連れて行つておいて、何か思惑と違つたから、殺そうとしたに違いなかつた。

「ただ俺はさ、なんか違う気がすんだよな。あの王様のことだから巫女さまつてのはホンモノで、でもなんかムチャ言つて断られて、そのせいで火あぶりじゃねえかなつて」

「ありそうだな……」

俺の居た町は王都から遠くて、王様とかあんま関係ないから、好きとか嫌いとかつて話もなかつた。けどこの辺じゃ、けっこう嫌われてるらしい。

「このあいだもどつかの使者を、無礼働いたとかで、首切つて晒してたからな」

王様つてのは、かなり血の氣の多い人みたいだった。

「その巫女って、どうなったか分かりますか？」

何か少しでも、分からないかと訊いてみる。

男が考え込みながら答えた。

「吹っ飛んだあと、ぶち切れた連中が殺してやるつつて、探して見つけたって言うてたな。ただそいつらもやられちゃったから、そのあとはどうなったか……」

とりあえず、そのとき生きてたのは確かみたいだ。

「俺、やっぱりこのまま王都行ってみます。あいつまだ、いるかもしれないんで」

「そうか、気をつけてな。会えること祈ってるよ」

別れてまた歩き出す。

第24節

道を行くとだんだん、行き会うひとたちの様子が酷くなっていった。埃まみれでボロボロっただけじゃなくて、どっかケガしてる人が多い。道端にしゃがみ込んでる人や、中には倒れて動かない人もいた。たぶんさっき言ってた、「ぜんぶ吹っ飛んだ」ときに、こうなっただろう。

まだ半分程度しか来てないのにこれじゃ、王都はこないだ俺らの町が魔物に襲われたとき以上に、ヒドいことになってそうだ。

これを、ファイアが。

背筋に冷たいものが伝う。

何かふつうとは違う、とんでもないモノを持ってるのは分かってたけど、こんなのもう人じゃない。

そう思うと怖くなって、足が止まった。

あの寂しげな表情を思うと、行かなきゃダメだと思う。けど、足が動かない。

「その坊や」

とつぜん、誰かに声をかけられた。

あたりを見回す。

「私よ」

いつの間にか、背の高い女の人がすぐ横に居た。

フードを目深にかぶってて、手には杖。外套はびっしり、不思議な紋様で縁取りされてる。どう見ても、どっかの魔道士ギルドに属してるのか、長年経験積んだ占い師とか、そんな雰囲気だ。

「ちょっとこっちへいらっしやい。あなたと、話さなきゃいけない

ことがあるようだから」

自分でもワケが分からなくなってたせいか、この人に言われるまま、俺は街道から離れたところまで行く。

「さて、と。ここなら誰も、聴く者もないわ。」

坊やはあの、巫女さまの知り合いね？」

驚く俺に、女の人が笑った。

「そんなに驚かなくていいわ、この水晶玉が囁いただけ。世の中には不思議なことは、ゴマンとあるのだし。」

さ、坊やも座りなさい」

野原の中にいくつも転がる大きな石のひとつを、俺に勧める。

「いい子ね。さて坊や、巫女さまをどう思う？」

とつさに答えられなかった。

「怖い？」

下を向く。

「怖いでしょうね。でも、それがふつうよ」

「え？」

この人は笑って言った。

「人は自分より強いものを、恐れるもの。殺されるかもしれないから、それは当たり前。だから、おかしいことじゃないわ」

女の人がそこで、一回言葉を切る。

ふっと、風が通ってった。

「けど坊や、いちばん怖かったのは、いちばん辛かったのは、誰かしら？」

「あ……」

そんなこと、考えるまでもなかった。それは間違いなくフィアだ。「行っておあげなさい。あの子、待ってるから。」

そうそう、そのペンダントを貸して」

言われるまま、俺はずっと持ってた、フィアのペンダントを差し出した。女の人が手をかざして、何か呪いを唱える。

「これで、あの子の居場所が分かるはず。さあ、早く行きなさい」

俺に返しながら、この人が急かす。

ペンダントを握るとたしかに、なんとなくフィアのいる方向が分かった。

「ありがとう え？」

視線を上げてお礼を言おうとしたときには、女の人姿はない。首をひねりながら歩き出すと、また違う人に呼び止められた。見るからに調理人って格好の、恰幅のいい人だ。

「あんた今、女の人と話してなかったか？」

「ええ。でも急に、いなくなっちゃって」

俺の答えに、調理人がなんとも言えない表情になる。

「俺は以前城の調理場で、長く働いてたんだが……あの人、ずいぶん昔に亡くなった、太后様だよ」

「え……」

背中があわ立つ。

太后さまってたしか、今の王の母親のことだ。その人が、とつくに死んでるのに、俺の前にいたってことは……。

おじさんが話を続ける。

「もともとは、力のある魔道士だったらしい。城のお抱え占い師になって、よく当たるって評判で、前王のお妃になったんだ。

亡くなれたあともこの国を心配して、ときどき姿を現すって、もっぱらの噂なんだよ」

「そうなんですか……」

そんな人がいたのに、なんでこんなことになったのか。そもそもなんで、そんな人が俺のところに出了たのか。思う俺の背に、風が囁いた。

あの子もあの人も、昔はあんなじゃなかった。私が、死ななければ。

声が空に舞い散る。

巫女の末裔よ、許して。国の者たちよ、許して。

そして最後に、俺の耳元で。

行ってあげて、あの子のところへ。

フィアのペンダントを握り締めて、俺は歩き出した。

第25節

F i a s i d e

ここは、どこだろう？

冷たい地面に身を横たえながら、フィアはそれだけを考えていた。帰りたい。

あの町へ、あの家へ。

廃墟と化した王都を後にして、何日過ぎたか分からない。東へ、そう思いながらも人が怖くて街道を行けず、離れたところを歩くうち、道も見失った。

手について身体を起こし、立ち上がろうと足に力を入れる。だが四つん這いになる前に、腕が力を失った。

ばちやりと泥のしぶきが上がり、顔と衣装を汚す。

どこをどう歩いたのだろうか？ いつの間にかフィアは、どこまでも続く泥地に迷い込んでいた。

乾いたのを潤そうと、近くの水たまりに片手を伸ばしてすくい、そつと口に含んで 思わず吐き出す。清流を望んだわけではないが、ぶくぶくと泡の立つ沼地の腐った水は、異臭を放っていて飲めなかった。

もうずっと食べていない。食べる気にもなれない。

それがよけい体力の衰えを招いているのは、フィアにも分かっていたが、どうすることも出来なかった。

ずっと館の中に閉じ込められ、せいぜいが別の館へ送り迎えされるだけだったフィアには、食べられるものが分からない。木の実や草やキノコさえ、探し出せないのだ。

街道を行けば、もう少しマシかもしれないが、それも出来なかった。

何もかもが、怖い。

心変わりする他人と、何より自分自身が怖い。

また同じことを起こしてしまうのが怖い。

けつきよく自分でも何がしたいのか分からぬまま、漠然と東を想い続け、ふらふらと歩き続けた。

だがそれもそろそろ、終わりかもしれない。

もともと歩くのもおぼつかないほど、弱っていたファイアだ。水も食料もない状態でさまよい歩くのは、無謀以外のなにものでもなかった。

現にもう、立てない。

ニールに会えないまま力尽きるのは寂しかったが、これでいいのだ、という気もしていた。それどころかあの路地裏で、ニールに拾われる前に、死んだほうが良かったのかもしれない。

助けてもらったばかりに、彼に怪我をさせ、王都を消してしまった。災厄を引き起こすだけの自分など、このまま人知れず朽ちていくほうが、いいに決まっている……。

そして、気づく。

自分が泣いていることに。

悲しいわけではない。嬉しいわけでもない。怒っているわけでも、悔しいわけでもなかった。

広がる虚しさの中、涙だけがこぼれる。

それがひどく辛くて、自分の中の思い出にすがりついた。

ニール、姉のイルゼ、ドクター。ほんとうにささやかで、でも暖かい日常。

ただそれだけで、良かったのに……。

どこにこれほど残っていたのか、そう思うほどに、涙があふれて止まらなかった。

なぜあのまま、いらなかったのだろうか？

なぜあのまま、そつとしておいてくれなかったのだろうか？
思いがずつと、そこで巡る。

そのとき、何かが囁いた気がした。

彼が、来るわ。

驚いて視線をさまよわせたが、人の姿も気配もなかった。
風が頬を撫でる。

巫女の末裔よ、許して。

それきり、風は沈黙した。

代わりに何かが泥の水面を乱す、規則正しい音。

「ファイア！」

いちばん聞きたかった声。

音の間隔が早くなる。

身体の向きが変えられる。

いちばん会いたかった、人。

「二、ル……」

かすれる声で呼ぶ。

「バカヤロ！」

そう怒鳴られたが、抱きしめられた腕の中は暖かった。

第26節 終幕

Neal

ファイアの状態は、ヒドいなんてもんじゃなかった。

どう見たって、最初に拾ってきたときより悪い。食べ物はもちろん、水もほとんど喉を通らなかった。きっと魔法使っても、もうムリだろう。

それでも何かになればと思って、俺は持ってきたペンダントを、ファイアにかけてやった。癒しの効果があるっていうなら、ちよつとは足しになるはずだ。

あと……俺自身もヤバイ。

身体が、石でも詰まっただみたいに重くてだるい。あと傷の治りきってなかったところが、少しヘンになって熱を持ってる。

走竜に乗ってるときからいろいろ少し感じてたけど、降りて歩いてから、一気に来た感じだった。

姉貴、ゴメン。

部屋から出たらダメだって、言われただけのことはある。

ただ、後悔はしてなかった。悪いことをしたとは思ってるけど、それでもファイアに会えたことのほうが、俺的には大きい。

いま居るのは、崩れそうな廃屋の中だ。ファイア見つけた沼地となり、小さな森の入り口に建ってた。

ずっと使われてないらしくて、中も外も荒れ放題だったけど、雨露がしのげるぶんかなり違う。

これからどうするか。

それがいちばんの問題だった。

フィアは、動かせるような状態じゃない。生きてるのが不思議なくらいだ。

ホントは誰か医者なり、人を呼んでくればいいんだろうけど、それでもできそうにない。どこに人が住んでるか分からないし、待たせてる間に、フィアがどうなるか分からない。万が一魔物や野獣にでも見つかったら、その場でエサだろう。

いろいろ考えてみて、けっきょく俺は、フィアを背負って連れてくことにした。

明るくなるのを待って、様子を見に、ちよつと外へ出てみる。けど街道は、さすがに見えなかった。でも街道から北へ来たはずだから、まっすぐ南へ進めば、そのうちぶつかるだろう。

なるべく早く出発したかったから、すぐ切り上げて小屋へ戻る。

フィアを早くどうにかしてやりたいし、俺もずつとはたぶんムリだ。

「フィア、ゴメン、移動するけどガマンしてくれな？」

言っとフィアは目を開けて、かすかにうなずいた。もう声を出すのも、おっくうなんだろう。

ぐったりしたままのこいつを、どうにか背負って小屋を出る。

そのとき、風が頬を撫でた。

こっちへ。

囁き声に視線をめぐらすと、昨日は気づかなかったけど、小屋の裏手から道が続いてた。

興味惹かれて、風に誘われるまま歩いてく。

「 泉？」

ほんの少し行ったところが、泉のある小さな広場になってた。ぽっかりそこだけ上が空いてて、遠く晴れ渡った空が見える。周りは名前も知らない大きな白い花や、もっと小さい花が、数え切れない

ほど咲いてた。

ほとりへフィアを降ろして、そっと手を入れて、すくう。久々の澄み切った水は、甘くて美味しかった。

「フィア、飲むか？」

言いながらこいつの口に、少し水を含ませてやる。でももう飲む力も残ってないみたいで、こぼすだけだった。

仕方なしに、こんどは持ってた布切れをよくゆすいで、顔や手足を拭いてやる。泥なんかで汚れきってたのが、元通り彫刻みたいにきれいになる。

ふっと、フィアが目を開けた。

引き込まれそうなほどに澄んだ瞳。

「だいじょぶか？」

大丈夫じゃないのなんか分かってるけど、そう訊く。

フィアがうなずいて、視線だけで、空と周囲を見回した。

「きれ……い、だね……」

「ああ」

森の中、日の光に花と水面とが照らされる。まるでおとぎ話の中に出てくる、秘密の泉みたいだ。

でも……ここはおとぎ話の中じゃない。

「ニール、あの、ね……」

「なんだ？」

苦しいはずなのに、フィアが必死に喋ろうとする。

「来て、くれて……嬉し、かった」

「バカ、当たり前だろ」

もっとほかに言うことがあるはずなのに、こんな言葉しか出てこ

ない。

「会いたかった、の……」

こいつの瞳から涙があふれて、何も言えなくなって、抱きしめる。
あの時みたいに、出てっからいままで何があったか、俺の中に
流れ込んでくる。

「ゴメンな、なんも出来なくて」
それしか言えなかった。

「ううん……」

フィアが首をふる。

「来て……くれた、から」

なんでこいつが。

なんでこんな目に。

心の底からそう思う。

フィアの望んだものなんて、なんの変哲もない、ごくごくぶつう
の生活だったのに。

「ニール」

フィアが遠い瞳をして、言った。

「好き……」

「俺もだ」

間髪いれずに思わず答える。

フィアはほんとうに嬉しそうに微笑んで、動かなくなった。

I l z e s i d e

花の咲き乱れる泉のそば、彼女は墓標に話しかけていた。

「もう、誰もあなたたちに、何もしいから……」

こんなことがあつてたまるか、そう思っている。だが現実には、特にフィアは、死んで初めて平穏を得たと言つていい。

あまりにも理不尽だった。

ここを知つたのは、不思議な風が囁いたからだ。王都が数日前に消えたと聞こえてきた頃、イルゼにそれは囁いた。

あの二人が、と。

それだけで何故かピンときたイルゼは、渋るドクターに頼み込んで、風を頼りにここまで来たのだ。

そして見つけたのは 折り重なるように倒れている、ニールとフィアだった。

何があつたのかは、だいたい見当がつく。ともかく二人はふたたび出会い、ここで力尽きたのだろう。

不意に、走る風が頬を撫でた。

気配を感じて辺りを見回す

「え？」

泉の向こうに、二人の姿がある。どちらも楽しそうだ。

「ニール、フィア！」

思わず声をかけたが、そのときにはもう姿は消えていた。

あるいは、最初から目の錯覚だったのか。

少し考えて、やはり気のせいではない、とイルゼは思った。そう信じたかった。

「また来るから。仲良くね？」

そんなこと言う必要はないと知りながら、二つの墓標に声をかける。

応えるように、楽しげな風が吹き渡った。

F i n

あとがき

最後まで読んでくださり、ほんとうにありがとうございます。昔から持っていた話を、やっと形に出来ました。

毎日書くのは大変でしたが、読んでくださる皆様のおかげで、無事完結させられました。

感想・批評大歓迎です。一言でもとても嬉しいので、お気軽にどうぞ

この話はこれで完結となりますが、シリーズ長編ルーフェイア・シリーズは、当分先まで連載します。こちらにもよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2114e/>

遠き風に願いし君は

2010年10月9日14時36分発行